

私たちの優しい 神の御業

神の性質における
新たな日の輝かしい夜明け

ジェイ・A・シュルバーグ



私たちの優しい 神の御業

神の性質における
新たな日の輝かしい夜明け

非暴力の神の主張：
神に関する誤解に挑み、
希望に満ちた別の視点を
提示する研究

ジェイ・A・シュルバーグ

著作権 © 2017 ジェイ・A・シュルバーグ

著作権保護：

著作権保護：

本書のいかなる部分も、グラフィック、電子的、または機械的手段（複写、録音、録画、情報保管・検索システムを含む）による使用・複製を、著者の書面による許可なく行うことはできません。ただし、批評記事や書評における短い引用についてはこの限りではありません。

聖書の引用は、キング・ジェームズ版聖書から引用されています。

印刷元



Fatheroflove.info

オーディオブックをダウンロード



2019 年 6 月

目次

あなたは一度でも疑問に思ったことはありませんか.....	5
本当にそれは重要なのか.....	7
私達の完全な模範.....	10
私達の生命の源.....	13
神のかたちに造られて	15
欺きの達人.....	17
罪とは何か.....	19
なぜ、悪魔が存在するのか.....	22
破壊する蛇.....	30
ヨブの捕囚.....	33
なぜ聖書を読み違えるのか.....	40
なぜ神を誤解するのか.....	42
神はどのように滅ぼすのか.....	47
神の怒りとはなにか.....	49
神はどのように戦われるか.....	62
ソドムとゴドラ.....	65
洪水についてはどうか.....	68
十字架の証.....	74
神は暴君ではない.....	77
私達の創造主と支え主	86
永遠の命を得るには.....	92
裁きを恐れるべきか.....	99
神の裁きとはどのようなものか.....	110
神は謙虚である	115
神は従者であり、奴隷の主人ではない	118
神はあなたを無条件に愛しておられる	121
神の国.....	123
神は真の自由を与えてくださる	128
Encapsulation 参考文献一覧.....	132

序文

あなたは一度でも疑問に思ったことはありませんか

法律用語では、自然の力によって引き起こされ、予防できないできない災害のことを**神の御業**と呼びます。この表現は、保険契約書にも頻繁に使われています。でも、そもそも私たちはなぜ、この世に起こる悪い出来事の責任は神にあるのだと考えるようになったのでしょうか。神は、竜巻や地震、ハリケーン、洪水などの自然災害が、いつどこで起こるかを、思うがままにお決めになるのでしょうか。神が何かをされて、これらの出来事を引き起こしているのでしょうか。神は、自分の望む結果を得るために、自然界を操作されているのでしょうか。それなら、なぜもっと私達の苦しみを防いでくださらないのでしょうか。そして最後に、聖書に記されている暴力は、神の責任にあるのでしょうか。**神自身**は、暴力に訴えなさったのでしょうか。

聖書は、これらの問いに対する答えを示しています。しかし、それらを見つけるためには表面下まで調べる必要があります。また、私たちは、神がご自身について語られることや、それが私たちの抱く神の信念を挑むものであったとしても耳を傾ける覚悟を持つ必要があります。

この書では、聖書に示されている神のご性質—神が何をなさる方なのか、そして同様に重要なのは、何をなさらない方なのかを探っていきます。多くの人は、神が私たちのルールに従う時だけ愛し、私たちの過ちに対して怒り、その命令に逆らう者を罰すると信じています。しかし、この研究の目的は、聖書を通して、神が破壊者としてではなく、創造者・支え手・救い主としてのみ行動されてきたことを示すことにあります。

しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りがない。

ーヤコブ³ 章¹⁷ 節

第 1 章

本当にそれは重要なのか

神がどのようなお方であることを知ることは、なぜ大切なのでしょうか。私たちが神についてどう考えるかは、本当に重要なのでしょうか。そもそも、神について考えること自体に意味があるのでしょうか。これらの問いへの答えは、私たちが知るべきすべてのものの基盤にあります。私たちが神とそのご性質について何を信じているかは、私たち自身の人格を形づくり、そしてその人格は、この世のどんな富よりも価値があります。イエスは言われました。

「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10 章 30 節）。父なる神と神の子イエスは、目的において一つであり、性格においても一つです。彼らの関係は、完全に調和しています。ヘブル人への手紙の著者は、イエスについて「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の完全な現れです」（ヘブル 1 章 3 節）と述べています。神の栄光とは、単にその輝きだけではなく、神のご性質そのものです。モーセが神にその栄光を示してくださるよう求めた時、神はモーセの前を通り過ぎながら、宣べられました：

「主、主なる神。あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代におよぼす者」（出エジプト記 34 章 6-7 節）

神が本当にどのような方であることを知ることは、私たちを神と和解させます。この知識は、癒しをもたらし、命を与えるものです。イエスが父なる神に祈られた言葉を聞いてみましょう。「永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなたと、

あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」
(ヨハネ 17 章 3 節)。イエスは、ご自身の言葉と生き方を通じて、父なる神がどのようなお方であることを余すことなく示されました。イエスはこう言われていました。「よくよくあなたがたに言っておきます。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。」
(ヨハネ 5 章 19 節)。

神が常に愛と憐れみに満ちたお方であることを知るとき、私たちは愛と信頼をもって神に惹きつけられます。神の道は決して変わることがないので、私たちはいつでも神の愛と善意を確信することができます。

神はマラキ書 3 章 6 節でこう宣言されています。「主なるわたしは変ることがない。」。神は、私たちのように変わることはありません。私たちは、公平に扱われ、尊重される限り、親切で愛に満ち、思いやりのある存在でいられます。しかし、私たちに害を及ぼす者に出会うと、怒りを感じ、報復したいという衝動に駆られます。神は決して怒りに任せて反応したり、報復されたりすることはありません。

神の言葉は、イエスも父なる神も変わらないことを確信しています。「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない。」(ヘブル 13 章 8 節)。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。」(ヤコブ 1 章 17 節)。これらの言葉は、私たちの優しい神に暴力的な側面がないことを証明しています。

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。

—ヨハネ 1 章 1 4 節

第 2 章

私達の完全な模範

山上の説教の核心において、イエスは敵対的な世界において生きるための完全な模範を私たちに示されています：

あなたがたは、隣人を愛し、敵を憎めと言われているのを聞いたことがあるでしょう。しかし、わたしは言います。敵を愛し、あなたを呪う者を祝福し、あなたを憎む者に善を行い、あなたを迫害し、侮辱する者のために祈りなさい。そうすることで、あなたがたは天におられる父の子となるのです。神は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも不正な者にも雨を降らせてくださいます。もし、あなたを愛してくれる人だけを愛するなら、どんな報いがあるのでしょうか。それは、取税人でもしているではありませんか。また、自分の兄弟姉妹にだけ挨拶するなら、なんのすぐれた事をしているのでしょうか。それも、取税人たちがしていることではないか。ですから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。（マタイ 5 章 43～48 節）。

この箇所は私たちに神について何を教えているのでしょうか。イエスは「敵を愛しなさい」と言われ、その後「それは、あなたがたが天におられる父の子となるためです」と続けられました。そして最後には、「だから、天の父が完全であられるように、あなたがたも完全でありなさい」と結ばれます。

イエスは、私たちに敵を天の父が敵を扱うのと同じように扱うよう求めておられるのです。イエスが山上の説教で示された高尚な原則は、神ご自身から始まるものであることを理

解するとき初めて達成可能になるということを、イエスは私たちに理解してほしいと願っておられます。

イエスの生涯の中に、私たちは**敵に対する完全な模範**を見出します。彼は、自分を傷つけた者たちに対して一度も報復しませんでした。裏切りと逮捕から十字架の死に至るまで、彼はただ迫害者たちの許しを願いました。「父よ、彼らをお許してください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」（ルカ 23 章 34 節）。そして、愛のみを示しました。

イエスがサマリタンの村で歓迎されなかったとき、弟子のヤコブとヨハネはこう言いました。「主よ、エリヤがしたように、天から火を降らせて彼らを滅ぼしましょうか。」しかしイエスは振り向いて彼らを戒め、こう言われました。「あなたがたは、自分がどのような霊に属しているか分かっていない。人の子は、人の命を滅ぼすためではなく、救うために来たのです」（ルカ 9 章 54～56 節）。

私たちが神がどのようなお方かを知る最も確かな方法は、**イエスの生き方を学ぶ**ことです。イエスは誰かを殺したことも、脅したこともありません。誰かを傷つけたことも、非難したこともありません。

フィリップが弟子たちを代表して、イエスに父を見せてくれるように頼んだとき、イエスはこう答えました。

フィリップよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと言うのか。わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。（ヨハネ 14 章 9～10 節）

神学の既成概念に挑む学びに踏み出すにあたり、われらは主イエスのお言葉と、その完全なる模範を常に心に留めておくことを決意しましょう。

第 3 章

私達の生命の源

神が常に愛に満ちた存在であるという真実を前提として確認したうえで、聖書に記されている中において、イエスが教えた原則とは正反対に見える神の行為を考察していきます。イザヤ書には、神の道と神の思いについての深い洞察が記されています：

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。
(イザヤ書 55 章 8～9 節)

神の道と神の思いは、私たちの道と思いより、目的と性質において無限に高いのです。この神に関する決定的な真理は、私たちには理解しにくいものです。私達は自分を正当化しようとするあまり、神を自分に似た存在だと思い込んでしまいます。怒りを感じると、神も同じように怒るに違いないと考えます。不当な扱いを受けた時に、神も報復する衝動に駆られるに違いないと考えます。しかし、神はそうではないと、教えてくれます：

あなたがこれらの事をしたのを、わたしが黙っていたので、あなたはわたしを全く自分とひとしい者と思った。しかしわたしはあなたを責め、あなたの目の前にその罪をならべる。(詩篇 50 章 21 節)

神が私達の世界を造られた時、自律的に機能することなど、決して意図されていませんでした。世界が神から切り離されて神がこの世界に関わらないとしたら、それは神の目的に反するだけでなく、地球上の生命そのものが存続できなくなっ

てしまうことを意味します。聖書にはこう記されています
「われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。」（使徒 17:28）。私たちが息をするその瞬間ごとに、神は私たちを支えておられるのです。

神は、すべての生命の源であり、支え主です。しかし、私たちを神から引き離すものが一つだけあります。それが「罪」です。では、罪とは何でしょうか。

私たちはしばしば、罪を悪い行いや神の戒めを破ることだと考えます。罪は量として測れるもので、多く持っている人もいれば、少ない人もいる、あるいはほとんどないという考えです。聖書では、私たちの悪い行いは、私たちが最初の人間から受け継いだもので、もっと深く根づいた病の「症状」であると教えています。その病とは、神は自分の利益だけを考えているという、嘘を信じることです。この嘘は、エデンの園で人類に植えつけられ、それ以来、私たちの神に対するイメージを歪めてきました。

神がアダムとエバを創造し、園に置かれたとき、彼らに与えられた制限はただ一つだけでした：

主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、必ず死んでしまう」。（創世記 2 章 16～17 節）

神が「命の木」（創世記 2 章 9 節）を園に置かれた理由は、私たちにも理解しやすいものです。しかし、「善悪の知識の木」が、あの完全な環境の中に置かれた理由は理解しにくいものです。最初にこの木の存在と、それを食べてはならないという警告を聞いたとき、それはまるで、災いへの誘いのように思えるかもしれません。

第 4 章

神のかたちに造られて

創世記の中に、私たちの期限が記されています。「神は言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう』...こうして神はご自身のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女に創造された」（創世記 1 章 26-27 節）。神のかたちに造られるとは何を意味し、神のかたちとは何でしょうか。神のかたちとは何かは、神がどのようなお方であることを示す定義の中に見いだされます。その最も明確な定義が、ヨハネの第一の手紙 4 章 8 節にあります。「神は愛である」。ここで注目すべきなのは、愛が神の多くの特徴の一つであるかのように「神は愛に満ちておられる」といった表現ではなく、単に、「神は愛である」と述べています。

神について私たちが知ることのできるすべては、この定義と調和していなければなりません。したがって、神が完全であるように、神の愛もまた利己心の欠片もなく完全でなければならないと合理的に結論づけることができます。さらに、神が不変であるように、その愛もまた不変でなければなりません。

もし、私たちが神の御姿に造られたのであれば、神によって愛を体験するために創られたに違いありません。しかし、愛というものは、命令されたり強制されたりしてするものではありません。それは、ただ自由な選択として与えられるものなのです。

このことは、愛に飢えた一人の人物が銃を手にバスに乗り込み、乗客たちに愛を要求し、従わなければ命はないと脅迫する、という状況を想像をすれば容易に理解できます。果たしてこの方法で、愛は生まれるのでしょうか。

たとえば、愛を得るためのより穏やかな方法として、私たちが近づくと「愛しています」と言うようにプログラムされたロボットを作るのです。この方法で、満たされて意味のある愛の関係が築けるのでしょうか。私たちにとって愛を確保できないこれらの方法が、神にとって機能するのでしょうか。

エデンの園、そしてあの謎めいた禁断の木に戻りましょう。もし神がその木を造らなかったら、人類は神のように愛することが可能だったのでしょうか。

愛が愛であるためには、それが自由に与えられる必要があります。自由に愛するためには、愛さないという選択の自由も必要です。愛とは、常に選択なのです。命令されたり、強制されたりして生まれるものではありません。

もし神が、最初の両親を創造し、彼らを楽園に置いた際に、神を愛さない、そして、信頼しないという選択の具体的な手段を与えなかったとしたら、彼らは神のように愛することは不可能だったでしょう。神が私たちの生命の源であるように、神はまた真実の愛の源でもあります。生命と愛は切り離すことのできないものなのです。神のかたちに造られたということは、私たち一人ひとりが、創造主と愛に満ちた友情を築く可能性を持っているということなのです。

神は、善悪の知識の木を園に置き、その枝から実を食べてはならないという制限を設けられましたが、それは私たちの従順さを試すための恣意的なテストではありませんでした。むしろ、それは神が私たちの選択の自由を非常に尊重しておられ、私たちが神から離れる選択をする可能性さえも受け入れる覚悟があったことを示すためでした。神が禁断の木を園に置かれた理由を理解すれば、私たちは神を自己中心的な独裁者だと非難することはなくなるでしょう。しかし、神をまさにそのように非難しようとした者が一人いました。

第 5 章

欺きの達人

さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」。女はへびに言った、「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。

－創世記 3 章 1～5 節（強調付加）

まず、この話す蛇の正体を明らかにしましょう。この蛇は、いったい誰なのでしょう。「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。」（ヨハネの黙示録 12 章 9 節）エバは単なる知性のある蛇と話していたのではなく、サタンーすなわち、欺きの達人そのものでした。

蛇は巧妙な暗示によって、神がアダムとエバに嘘をつき、彼らから良いものを隠していると非難しました。さらに、もし彼らがその実を食べるだけで、目が開かれ、「善悪を知る神」のようになると。では、女は、神かサタンか、どちらを信じることを選んだのでしょうか。

女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実

を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。(創世記 3 章 6～9 節)

アダムとエバが禁じられた木の実を食べたとき、彼らの目は開かれ（自己意識が芽生え）、神から身を隠そうとしました。神はどう反応されたのでしょうか。神は彼らを探しに来られました。神の最初の言葉は、「あなたはどこにいるのか。」でした。神は、今や疎遠となった子供達との和解を求めておられました。

人の子がきたのは、失われたものを尋ね
出して救うためである。

—イエス (ルカ 19 章 10 節)

第 6 章

罪とは何か

さて、質問に戻りましょう：罪とは何でしょうか。正しい定義を見つけるためには、まず「善悪の知識の木」で何が間違ったのかを正確に特定することが重要です。創世記 3 章 6 節で、女は木に 3 つの魅力的な特徴を見ました：

1. 「その木は食べるのに良さそうだった。」
表面上はこれは真実のように思えるかもしれませんが、その木が食物の源として禁じられていたという事実を忘れてはなりません。問題は果実そのものではなく、女がそれを良いものとして見ていた点です。

2. その木は「目を楽しませるもの」でした。神が園に創造されたすべてのものは完璧であったため、確かにその木も「目を楽しませるもの」でした。女はその木に、もうひとつの魅力的な性質を見出したのです。

3. 「木は人を賢くするのを望んだ。」本当に？この木には神秘的な力があったのでしょうか。蛇の言葉は正しかったのでしょうか。善悪の知識を持つことは、本当に望ましいこととなのでしょうか。そして、善悪の知識を持つとはどういう意味なのでしょうか。それは単に情報を得ることなのでしょうか。

その節は「女はその実を取って食べ、また、共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。」と締めくくられています。これはしばしば、人類最初の罪と理解されていますが、罪とは何だったのでしょうか。果実を食べたことか、それとも神の嘘を信じたことか、どちらが先だったのでしょうか？

根本的な問題は、エバが「神は良いものを自分たちから自分本位に隠している」とする蛇の嘘を信じたことにありまし

た。罪とは、単なる行動ではなく、測定できる物質のようなものではないのです。罪の本質は、神を自己中心的な存在と見なし、そのため神を信頼できなくなるという、心の病的な状態なのです。

罪は、病気と比較することができます。病気には、細菌感染、代謝異常、免疫系の機能不全など、根本的な原因があります。これらの主な原因は、発熱、吐き気、痛み、めまい、倦怠感など、さまざまな症状を引き起こします。罪の場合、その根本的な原因は、神についての嘘を信じることです。その結果、他者への愛を基盤とする神から自らを引き離してしまうのです。私たちの外面的な罪（症状）は、「神は自己中心的である」という誤った信念（病理的原因）の結果なのです。イエスは、律法学者やパリサイ人との対話の中で、罪が癒しを必要とする病としてたとえられました：

そして、パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。（マルコ 2 章 16～17 節、協調付加）

罪は致命的なものなのです。それは、命の源である神から私たちを引き離してしまうからです。この分離が起こる際、決して神が私たちから離れるのではありません。常に私たち自身が生かされてしまうのです。アダムとエバは、恐れるべきサタンではなく、神を恐れるようになりました。木の実を食べた後、聖書はこう記しています。「アダムとその妻は、主なる神の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した」（創世記 3 章 8 節）その日以来、私たちは優しさに満ちた神から身を隠し続けているのです。

私たちが注意すべきことは、神がアダムとエバに禁断の木の実を食べてはならないと警告されたとき、神は、「それを食べたその日に、私はあなたを殺す」。は言われませんでした。神は、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」（創世記 2 章 17 節）と言われたのです。

男とその妻がその木の实を食べた時、彼らは命の源である神から自ら離れることで、死の過程がその日から始まりました。罪（神は自己中心的で信頼できないという嘘を信じる行為）が致命的なものであり、神ではありません：「罪の支払う報酬は死である」（ローマへの手紙 6 章 23 節）神は罪に関与しておらず、罪の報酬を支払うこともありません。

また、アダムとエバが禁断の木の实を食べたとき、彼らは善悪についての知識を得ただけではなかったことも明らかです。彼らは知らず知らずのうちに、自分達とその子孫が善と悪の知識を体験する道へと踏み出してしまったのです。彼らは単に悪について知るだけでなく、それを思い、それを生き、それに支配されるようになりました。その結果、痛み、苦しみ、恐怖、そして死を知ることになったのです。

罪が私たちの世界に入り込んだ時に、避けられない結果を受けることになったのは人類だけではありませんでした。アダムとエバの罪によって引き起こされた創造物と被造物との間の不調和は、すべての自然界に影響を及ぼしました：「被造物全体が今に至るまで、共にうめき、共に産みの苦しみを続けている」（ローマ人への手紙 8 章 22 節）。

地球は、人類や動物にとって危険な場所となりました。ノアの時代の洪水以来、地球は激しい天候、地震、火山噴火、その他の自然破壊的な力にさらされるようになったのです。自然界に見られる荒々しい力は、神から来たものではありません。それらは、私たちが神を私たちから遠ざけたからこそ存在するのです。

第 7 章

なぜ、悪魔が存在するのか

神に対立する文字通りの霊的存在については、すでに言及されています。この存在は聖書の中で、サタン、悪魔、蛇、レビヤタン、ルシファーなど、その他いくつかの名称で呼ばれています。

約 200 年前と比べて、現代の西洋社会では、悪魔という存在を文字通りに信じる人の割合は大きく減少しています。現代の文化では、サタンはしばしば迷信や無知の領域に追いやられています。この考えを念頭に置き、またその問いに答えるかたちで、聖書に記されているサタン「敵対者」を探っていきたいと思います。

サタンは聖書において墮天使とされています。墮ちたという表現は、もともと彼が罪のない存在でありながら、創造主に反逆する道を選んだことを示唆しています。天国という完全な環境を考えると、なぜ彼が神に背いたのかは謎に包まれています。どうやら彼は、天使たちの中でも名誉と影響力のある地位にあったようです。ある時点で、彼の内に誇りの芽が生じ、それが成長し、天国における自らの立場に不満を抱くようになりました。そして最終的には、神に対する公然たる反逆へと至ったのです。

サタンは、反逆の中で独りではありませんでした。彼は多くの天使たちからの支持を得ることができましたが、大多数の天使は神への忠誠を貫くことを選びました。このサタンの反逆によって起こった戦いは、世界の争いのように物理的な武器が使われる戦いではありませんでした。

神はこの天の戦いにおいて、利己主義に対して愛を、欺きに対して真実を、秘密主義に対して透明性を、非合理に対し

て理性を、絶望に対して忍耐を、疑念に対して信頼をもって勝利されたのです。

エデンの園でサタンがエバを神から疎外させるために用いた手法は、彼が天において仲間を得るために以前から用いていたものと、同じであったと考えるのは自然なことです。それまで、神の公正さに疑問を投げかける者は、天の御使いたちの間にはいませんでした。彼らには、サタンの告発が真実かどうかを絶対的に確かめる術がなかったのです。

このため、サタンには、自らの統治の方法を示す機会が与えられたのです。

私たちは、なぜ神が反逆の始まりの時点で敵対者を滅ぼさなかったのかと疑問に思うかもしれません。そうしていれば、反逆の拡大を防げたのではないか。いいえ、それはむしろ、サタンの神に対する告発に正当性があると天使たちに確信させるだけだったでしょう。もし神がサタンを滅ぼしていたら、その行為自体が自由を否定し、実体のない空虚な理想にしてしまっていたのです。それだけではありません。聖書を研究を一貫するのであれば、証拠の重みは、神が滅ぼすのではない一罪が滅ぼすと示しています。サタンは最終的に滅ぼされることになります。この滅びは神によるものではなく、サタン自身の罪によってもたらされるのです：

さらに、主の言葉が私に臨んで言われた。
人の子よ、ツロの王のために哀歌を唱え、彼に言え。
主なる神はこう言われる。あなたは知恵に満ち、美の
きわみである完全な者である。あなたは神の園、エデ
ンにいた。あらゆる貴石があなたを覆っていた。すな
わち赤めのう、黄玉、青玉、貴かんらん石、緑柱石、
縞めのう、サファイヤ、ざくろ石、エメラルド。そし
てあなたの象眼も彫刻も金でなされた。
これらはあなたの造られた日に、あなたのために備え
られた。あなたは油注がれた守護のケルブであり、私

はあなたをそのように定めた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩き回った。あなたは創造された日から、不義があなたの中に見出されるまではその道において完全であった。あなたの商売が盛んになると、あなたの中に暴虐が満ちて、あなたは罪を犯した。それゆえ、私はあなたを神の山から汚れた者として投げ出す。守護のケルブよ、私はあなたを火の石の間から追い出した。あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚した。わたしはあなたを地に投げうち、王たちの前に置いて見せ物とした。あなたは不正な交易をして犯した多くの罪によって、あなたの聖所を汚したゆえ、わたしはあなたの中から火を出してあなたを焼き、あなたを見るすべての者の前で、あなたを地の上の灰とする。民の中であなただを知る者は皆、あなたに驚く。あなたは恐怖となり、もはや永遠に存在することはない。（エゼキエル書 28 章 11～19 節、強調付加）

ティルス王はこの記述において、適切にサタンを象徴しています。サタンは、誇りや利己心のかけらもない、完璧な存在に創造されました。彼の完璧さから墮落は、彼自身の行いであり、その選択に言い訳の余地はありませんでした。彼は自ら美しさゆえに誇り高くなったのです。サタンを滅ぼす「火」は、外から来るものではなく、それは彼自身の内側から生じるものです。この火こそが彼の利己心です。自ら生み出したこの火が、彼を焼き尽くすのです。サタンはやがて存在しなくなるでしょう—「もはや永遠に存在することはない」。

ああ、ルシファーよ、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座

を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、
雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。
(イザヤ書 14 章 12～14、強調付加)

ルシファー（サタンの元の称号）は、自らを高めようとしたために墮落しました。イエスは弟子たちにこう教えられました。「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。」（マタイ 23 章 12 節）。ルシファーは、自ら卑しめられる結果を招いたのです。「わたしは、いと高き者のようになろう」という彼の言葉は、彼が神の地位だけを切望したという真実をさらけ出しています。彼は神の性質（創造された存在が神に似る唯一の道）を反映することには関心がありませんでした。

この一節を検討する際には、神について述べられている考えがルシファー自身のものであり、神の動機を正確に描写したものではない点にも留意すべきです。ルシファーは自己を高めたいという執着のあまり、神も同じ利己的な動機を持っていると想像するようになったのです。

さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。（黙示録 12 章 7～9 節）

この一節は、サタンが欺きの働きを始めた天の戦いを記録しています。彼の働きは地球の片隅にとどまるものではなく、「全世界」を欺いてきたのです。

そして彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。」（ルカによる福音書 10 章 18 節）

イエスはここで、サタンが忠誠から反逆へと転じた、その急速な墮落について語っておられます。

こうしてわたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされたのだ。（コリント人への第一の手紙 4 章 9 節）

天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。（ペテロの手紙一 1 章 12 節）

サタンが天で反逆し、多くの天使たちを連れて去った時、残された忠実な天使たちは、何が起きているのか、そしてその理由を完全には理解していませんでした。福音のメッセージは、私たちと同様に彼らのためのものであり、人類が自らを滅ぼすことから救うために、この地で神が示される無私の働きに強い関心を抱いています。

「永遠の福音」（黙示録 14 章 6 節）は、神の信頼性に対する疑いが宇宙から削除され、永遠の安全が保証されているという保証です。「あなたがたは主に対して何を計るか。彼はその敵に二度としかえしをする必要がないように敵を全く滅ぼされる。」（ナホム書 1 章 9 節）。

さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」。イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである』と書いてある」。それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、

「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」。イエスは彼に言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。そこで、悪魔はイエスを離れ去り、そして美よ、御使たちが来てイエスに仕えた。（マタイによる福音書 4 章 1～11 節、強調付加）

サタンは誘惑者としてイエスのもとに現れました。彼の明らかな目的は、イエスの父なる神への信頼と依存を断ち切ることでした。サタンは、エデンの園でエバに対して用いたのと同じ手法を用いて成功を収めていました。彼は、イエスが神聖な力を自己の利益のために用いるよう誘惑することで、人類を救うためにこの世に来たイエスの目的を妨げようと決意していました。

この欺く者は、イエスが神の無私の愛を明らかにするという使命に成功することを、何としても阻止しようとしていました。なぜなら、それこそがサタン自身を偽り者として暴くことになるからです。

ある誘惑の場面で、悪魔はイエスに「世界の王国」を差し出しました。ただひとつ、イエスがひれ伏して彼を礼拝するならば、と。注目すべきは、イエスが悪魔の「世界の王国」に対する支配権の主張を争わなかったことです。神が最初に人間を創造された時、人類に「地のすべてを治める」権威を

与えられました（創世記 1 章 26 節）。しかし、アダムとエバが創造主についてのサタンの嘘を信じた時、彼らはその支配権を事実上、悪魔に譲り渡してしまったのです。

私たちは「世界の王国」において、欺き、抑圧、強制、不平等を目にします。しかし神の王国では、いかなる時も、いかなる状況でも、力による支配は用いられません。神の王国と世界の王国には、似ているところはまったくありません。この世は法による統治に頼りますが、神の王国は愛の法によって成り立っているのです。

わたしはもはや、あなたがたに、多くを語るまい。この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない。（ヨハネによる福音書 14 章 30 節）

イエスは、サタンこそが「この世の主君」であることを明言されています。私たちがサタンの存在や、彼の地球における広範な影響力を否定するとき、知らず知らずのうちに、自らの苦しみの責任を神に負わせてしまうことになります。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。（ペテロの手紙一 5 章 8 節）

悪魔こそが私たちの敵である一神ではない。

悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。（エペソ 6 章 11～12 節）

私たちが皆、人類に押し付けられた神についての欺瞞の犠牲者であると気づいた時、他の人々を敵としてではなく、この巨大な欺瞞の同じ犠牲者として見るようになるでしょう。

彼らは、底知れぬ所の使を王にいたっていており、その名をヘブル語でアバドンと言ひ、ギリシヤ語ではアポロンと言う。（ヨハネの黙示録 9 章 11 節）

「底なしの穴の使い」とはサタンを指します。ここで彼に与えられた名、アポリオンは、ギリシヤ語で「破壊者」を意味します。サタンこそが破壊者なのです。

では、私たちはこの優しい神に、この同じ称号を実質的に与えることに、正当な理由があるでしょうか

盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。

—イエス（ヨハネによる福音書 10 章 10 節）

第 8 章

破壊する蛇

神がエジプト人に下された災いは、神による最も意図的な破壊行為のように見えます。表面的には、聖書の記述されたこれらの出来事を他の方法で解釈する余地はありません。しかし、先ほど読んだ聖句を思い出してください「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。」（イザヤ書 55 章 8 節）。

モーセは神から、イスラエル人をエジプトの奴隷状態から自由へと導く使命を与えられました。彼はファラオの前に立ち、国に迫る災いの前兆を警告するよう命じられました。神が荒野でモーセと出会った時、神は彼に一つの実証的な教訓を授けられました。それは、後にモーセとアロンがファラオの前でこの教えを実演することとなり、これから起こる破滅的な出来事において、神の役割がどのようなものかを、支配者に明確に示すものでした：

主は彼に言われた、「あなたの手にあるそれは何か」。彼は言った、「つえです」。また言われた、「それを地に投げなさい」。彼がそれを地に投げると、へびになったので、モーセはその前から身を避けた。主はモーセに言われた、「あなたの手を伸ばして、その尾を取りなさい。そこで手を伸ばしてそれを取ると、手のなかでつえとなった。（出エジプト記 4 章 2～4 節）

そこで、主は言われた、「あなたの兄弟レビ人ロンがいるではないか。わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている。...彼はあなたに代って民に語るであろう。彼はあなたの口となり、あなたは彼のために、神に代るであろう。あなたはそのつえを手執り、それ

をもって、しるしを行いなさい」。(出エジプト記 4 章 14 節, 16～17 節)

モーセは神の代表としてファラオの前に立つことになっていました。この奇跡における神の目的は、単なる力の誇示以上のものでした；真の破壊者を明らかにする実例を示す行為でした。神の代表者であるモーセが手に杖を握った時、それは神の支配下にある自然の力を象徴していた。神の守りの手が破壊的な自然の力を抑えている限り、エジプトに害が及ぶことはなかった。

しかし、モーセがその杖を地に投げると、それは蛇となり、悪と破壊の象徴となった。これは、自然の力が神の支配から外れ、破壊者であるサタンの支配下にあることを象徴していた。

モーセの時代より何百年も前、ヨセフ（異母兄弟たちに奴隷として売られた人物）がファラオの不穏な夢を解き明かした後、イスラエルの子孫にとってははるかに良い状況が整えられていました。ファラオは、預言的な夢を解釈し、七年間の飢饉に備えて国を準備したヨセフの先見の明を評価し、彼を名誉と尊敬の地位に昇進させました。ヨセフの家族も温かく迎え入れられました。エジプト人たちはヨセフと彼が信じる神に感謝の意を示しました。神はその国を豊かに祝福することができました。

しかし、ヨセフの死から長い年月が経つと、エジプト人たちは彼とその神のことを忘れ、その地で繁栄し増え広がっていたイスラエルの子らを奴隷として扱うようになりました。エジプト人は自らの行いによって、神の臨在を望んでいないというメッセージを送っていました。彼らには自分たちの神々があり、奴隷の神を認めようとはしなかった。神は、エジプト人が自ら神から離れる自由を選んだ以上、もはや以前

のように祝福と守りを完全に与え続けることはできませんでした。

もし、災いが始まった後のいずれかの時点で、ファラオが反抗的な態度を改め、イスラエル人を解放していたならば、神は再び自然の力を御手のもとに置き、災いは終わっていたであろう。しかし、この頑固な支配者はそうしなかったため、エジプトは荒廃に陥りました。神が杖と蛇に込められた象徴的なメッセージを考えると、エジプトの災いにおける神の役割はより明確になります。

自然の力による破壊の責任から神を免罪するさらなる根拠は、『列王記上』に見出されます。預言者エリヤは、その使命の低調期に、命を狙うイゼベル王妃から逃れて洞窟に身を隠していたとき、神はその逃亡中の預言者のもとに来られた：

主は彼に言われた、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか」。彼は言った、「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀をもってあなたの預言者たちを殺したのです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。主は言われた、「出て、山の上で主の前に、立ちなさい」。その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後には地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後には火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。（列王記上 19 章 9～12 節、強調付加）

わが優しい神は、今もなお、静かで細い声で、最もはっきりと語りかけられるのです。

第 9 章

ヨブの捕囚

ヨブ記は、苦しみと破壊の行為におけるサタンの役割を明確に示しています。また、神と悪の勢力との霊的な戦いの舞台裏を垣間見せてくれます。「完全で正しい人」（ヨブ記 1 章 8 節）であるヨブは、この霊的な戦いの重要な局面で、激しい交戦の渦中に巻き込まれることになりました：

ある日、神の子たちが来て、主の前に立った。サタンも来てその中にいた。主は言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンは主に答えて言った、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。主はサタンに言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。サタンは主に答えて言った、「ヨブはいたずらに神を恐れましようか。あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらん下さい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」。主はサタンに言われた、「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」。サタンは主の前から出て行った。（ヨブ記 1 章 6～12 節）

サタンは直ちにヨブの持っていたものすべて、息子や娘たちまでも滅ぼそうと動き出しました。続く破壊の中で、サタンは敵の略奪者「シバ人」（15 節）や「カルデヤ人」（17 節）を用い、「神の火が天から下った」（16 節）ことや、

「荒野からの大風」（19 節）などの手段を使って、ヨブに襲いかかりました。

ヨブ記では、誰が破壊者であるかは明確に描かれていますが、それでも多くの読者はヨブの苦しみに心を痛めます。それは、神がサタンにヨブを苦しめることを許したと誤って理解されているからです。神は全能なのだから、サタンによるヨブへの攻撃を防ぐべきだったのではないかと考える人もいます。しかし、ここで問題となっているのは神の力ではありませんでした。常に、そしてこれから、神の統治の原則が問われているのです—すなわち、神は知性を持つ被造物に一貫して自由を与えているのか、それともそうではないのか。自由が真の自由であるためには、それは取り消すことのできないものでなければなりません。つまり、いかなる状況下でも変更不可能であり、撤回できないものでなければならないのです。

ヨブの場合、神の評判だけでなく、もう一つ重要な問題がありました—それは私たちの地球です。サタンは、この世界（敵に占領された領域）を自らの主権国家にしようと策略を練っていたのです。「主はサタンに言われた、『お前はどこから来たのか』。サタンは主に答えて言った、『地を行き巡り、あちこちを歩いてきました』」（ヨブ記 1 章 7 節）

もし私たちが行間を注意深く読み取るなら、サタンは本質的に神にこう言っていたと考えられます。「私は地をくまなく歩き回ってきました。そして、私の主張には地の全面的な支持があるように見えます；私は地における絶対的な支配権を主張します」と。

その後続くドラマの中で、神は（感謝すべきことに）常にサタンの一歩先を行かれました。—神はご自身の信頼するしもべを知っておられたのです。ヨブは、聖書の中で記録されている中で二番目に凶悪なサタンの攻撃を受けながらも、神への信仰を貫きました。そして最後には、神がヨブの命を

守り、「ヨブが友人たちのために祈ったとき、主はヨブの繁栄をもとにかえされた。」（ヨブ記 42 章 10 節）。実際、ヨブの友人たちは彼以上に危険な立場にありました—彼らは神を知らなかったのです。

ヨブ記は、神と闇の勢力との間で今も続く霊的な戦いについて私たちに深い洞察を与えてくれます。神が明確に見ておられる、複数の自由意志が絡み合う計り知れないほど複雑な相互作用を、私たちが少しでも思い描くことができるようになれば、神が直面しておられる課題の大きさを、私たちは理解し始めることができるでしょう。

私たち知性ある存在は、この世界において決して孤独ではありません。数多くの霊的存在が私たちと空間を共有しています。—サタンと墮天使たちの軍勢を含む。私たち一人一人の自己中心的な性質、そして悪魔的な存在の性質を考えると、この地球は、自己中心的な自由意志同士が日々衝突する舞台となっています。特に私たちにとって理解が難しいのは、サタンとその悪霊の軍勢が、どのようにして神を妨げたり、対抗したりできるのかという点です。

神がこの地球上のすべてに対して絶対的な支配と権威を振るっておられるわけではないと気づく時、私たちは不安に感じることがあります。しかし、神は私たち一人一人の人生を支配したいとは望んでおられませんし、それは神の本質にも反します。神は私たちを、自由で知性ある存在として創造されました—操り人形としてではなく。

ヨブ記の冒頭では、三人の主要な登場人物が描かれています。神、サタン、そしてヨブです。しかし、この書の結末では、サタンの名前は一切登場しません。神とのこの壮大な出会いの決定的な場面で、なぜサタンは姿を消したのでしょうか。

ヨブ記の全 41 章は、神が「レビヤタン」と呼ばれる謎の生き物に焦点を当てています。レビヤタンとは何者なのでしょう。聖書は、この生き物の正体を特定する手がかりを何か与えているのでしょうか。「その日、主は堅く大いなる強いつるぎで逃げるへびレビヤタン、曲りくねるへびレビヤタンを罰し、また海における龍を殺される。」（イザヤ書 27 章 1 節）ここで言われている「刺す蛇」「曲がりくねる蛇」「海にいる龍」とは誰のことなのでしょう。そして、「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。」（黙示録 12 章 9 節）ヨブ記 41 章を検証し、この生き物の描写に悪魔的な特徴を見出せるか考察しましょう：

あなたは、つり針でわにをつり出すことができるか。
糸でその舌を押えることができるか。あなたは葦のなわをその鼻に通すことができるか。つり針でそのあごを突き通すことができるか。これはしきりに、あなたに願い求めるであろうか。柔らかな言葉をあなたに語るであろうか。これはあなたと契約を結ぶであろうか。あなたはこれを取って、ながくあなたのしもべとすることができようか。あなたは鳥と戯れるようにこれと戯れ、またあなたのおとめたちのために、これをつないでおくことができるであろうか。商人の仲間はこれを商品として、小売商人の間に分けるであろうか。あなたは、もりでその皮を満たし、やすでその頭を突き通すことができるか。あなたの手をこれの上に置け、あなたは戦いを思い出して、再びこれをしないであろう。見よ、その望みはむなしくなり、これを見てすら倒れる。あえてこれを激げきする 勇気 ゆうきのある 者 もの はひとりもない。それで、だれがわたしの 前 まえ に 立 た つ こと ができるか。だれが先にわたしに与えたので、わたしはこれに報いるのか。天

が下にあるものは、ことごとくわたしのものだ。わたしはこれが全身と、その著しい力と、その美しい構造について黙っていることはできない。だれがその上着をはぐことができるか。だれがその二重のよろいの間にはいることができるか。だれがその顔の戸を開くことができるか。そのまわりの齒は恐ろしい。その背は盾の列でできていて、その堅く閉じたさまは密封したように、相互に密接して、風もその間に、はいることができず、互に相連なり、固く着いて離すことができない。これが、くしゃみすれば光を発し、その目はあけぼののまぶたに似ている。その口からは、たいまつが燃えいで、火花をいだす。その鼻の穴からは煙が出てきて、さながら煮え立つなべの水煙のごとく、燃える葦の煙のようだ。その息は炭火をおこし、その口からは炎が出る。その首には力が宿っていて、恐ろしさが、その前に踊っている。その肉片は密接に相連なり、固く身に着いて動かすことができない。その心臓は石のように堅く、うすの下石のように堅い。その身を起すときは勇士も恐れ、その衝撃によってあわて惑う。つるぎがこれを撃っても、きかない、やりも、矢も、もりも用をなさない。これは鉄を見ること、わらのように、青銅を見ること朽ち木のようなのである。弓矢もこれを逃がすことができない。石投げの石もこれには、わらくずとなる。こん棒もわらくずのようにみなされ、投げやりの響きを、これはあざ笑う。その下腹は鋭いかわらのかけらのようで、麦こき板のようにその身を泥の上に伸ばす。これは淵をかなえのように沸きかえらせ、海を香油のなべのようにする。これは自分のあとに光る道を残し、淵をしらがのように思わせる。地の上にはこれと並ぶものなく、これは恐れのない者に造られた。これはすべての高き者をさげすみ、すべての誇り高ぶる者の王である」。(ヨブ記 41 章、強調付加)

神はこの章で、象徴的な言葉を用いて、非常に強力で同情心のかけらもない敵を描写しています。私たちは、この敵に対して自力で戦うことはできません。神は、想像しうる最も手強い敵との激しい戦いを繰り広げられているが、それでも神は、いかなる時も、いかなる状況においても、武力に頼ることなく、私たちのためにこの戦いを戦い抜くことを固く決意しておられるのです。

サタンは、神をまるで自分自身のように見せかけてきました：怒りに満ち、復讐心に燃え、赦さず、強引で、律法主義的で、批判的で、厳格な存在として。一方で彼自身は、「光の天使に擬装する」（コリント人への第二の手紙 11 章 14 節）のです。しかし、神は私たちには見えないものをはっきりと見抜いておられます—欺く者が、その技をどれほど巧みに操っているかを。

神の敵対者に対する象徴的な描写を通して、神が私たち一人一人のために日々戦っておられることを理解することができます。サタンがその限界を越えて、聖霊に心を開いている者たちを妨げたり滅ぼそうと必死になる時、神は介入してご自身の御子らを危険から守られることがあります。そのような介入の一部は私たちにも明らかですが、ほとんどは気づかれないままです。その結果として、この世に見られる苦しみのために、神は日々非難を浴び続けるのです。しかし、ヨブの経験が私たちに教えてくれるのは、神が知性ある被造物の自由意志を尊重しつつ、あらゆる事故、災害、病気、死を防ぐことはできないということです。

神がはっきりと見抜いておられることが、もう一つあります。神だけが自存される方です—サタンはそうではありません。サタンは悪を選んだ被造物であり、悪はその存在を善に完全に依存しているのです。宇宙の知性ある存在すべてが神の信頼性に関する啓示という文脈において、この真理を理解

した時、神は悪の起源であるサタンが自滅することを許されるでしょう；それ以上に公平なことがあるでしょうか。

恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。

—イザヤ書 41 章 10 節

第 10 章

なぜ聖書を読み違えるのか

聖書は、神からの口述筆記として書かれたものではありません。「人々が聖霊に感じ、神によって語ったもの」（ペテロの第二の手紙 1 章 21 節）とあるように、聖書は、各執筆者自身の言葉を用い、それぞれの文化的背景、経歴、人格の文脈の中で、人によって書かれたものなのです。

なぜ聖書では、神がしばしば「破壊者」として描かれているのでしょうか。この問いに答えるためには、まず古代聖書時代の宗教文化を考察することが有益です。一つ明らかなのは、聖書の物語の中心人物であるイスラエル人が、偶像崇拜の影響に常に囲まれていたということです。偶像崇拜を避けるようにという明確な警告があったにもかかわらず、彼らは周囲の人の偶像崇拜的な慣習に絶えず影響されていました。イスラエル人の神に対する理解は、当時の支配的な文化によって歪められていたのです。

神は、ご自身を人々に現したいと切に願っておられました。しかし、神のご性質の栄光を完全に現すことは、かえって人々を神から遠ざけてしまうことになったでしょう。そこで神は、たどり着きたいと願っておられる人々のレベルに自ら身を低くし、彼らに通じる言葉で語る必要がありました。神は、イスラエル人との関わりの中で誤解されることをも厭わず、彼らが自らを滅ぼしてしまうのを防ぐために、そうされたのです。

さらに、古代の聖書の地においては、悪霊の影響を受けた人々は、暴力的で怒りっぽい神々を作り上げていました。彼らは、自分たちが被った災害や不幸は、これら怒れる神々によってもたらされたと信じていたのです。その結果、人々は

彼らの怒りを鎮めるために犠牲を捧げ、宗教的な儀式の中でこれらの神々にひれ伏していました。

旧約聖書では、この世の苦しみや死の真の原因であるサタンについて、比較的ほとんど言及されていません。もしサタンが、人々被った災いの責任者として明確に示されていたなら、彼らの関心は神ではなくサタンに向けられていたことでしょう。イスラエル人は、サタンを自然の力を操る強力を持つ別の神と見なしたでしょう。そうなれば、彼らはサタンに犠牲をささげ、そうすることで神ではなくサタンを礼拝することになっていたでしょう。

神は、人々が受けた良いものだけでなく悪いものまでもが、すべて神自身に由来するものとして認識されることを許すことで、このような事態を防ごうとされました。神が最も気にかけておられたのは、ご自身の評判よりも、真の破壊者の正体を早まって明かしてしまうことで、人々にどのような影響が及ぶかを神は深く案じておられたのです。このように神が無私の寛容を示されたにもかかわらず、人々はなおも偶像礼拝を通して悪魔的な存在に崇敬を捧げました。「彼らは神にではなく、悪霊に犠牲をささげた」（申命記 32 章 17 節）

古代のイスラエル人は、神の優しく愛に満ちたご性質をはっきりと示される準備ができていませんでした。もし神が、真の姿—無私の愛—で彼らの前に現れていたなら、彼らは神を完全に拒絶していたでしょう。彼らが望んでいたのは、自分たちのために戦い、敵に対して暴力を振るってくれる神でした。イスラエル人は、自分たちのような神を求めていたのです。「神はご自身のかたちに人を創造された」

（創世記 1 章 27 節）という真理を受け入れる代わりに、彼らは神を自分たちのかたちに創り上げようとしていました。このことは、私たちが（もし私たちがそれを考える意思があるならば）、人類が時代を超えて今日に至るまで、神とどのように関わってきたかを理解する手がかりを与えてくれます。

第 11 章

なぜ神を誤解するのか

神が私たちの地を歩まれたとき、宗教的指導者たちには認識も、歓迎もされませんでした：

彼らが出て行くと、人々は悪霊につかれて口のきけない人をイエスのところに連れてきた。すると、悪霊は追い出されて、口のきけない人が物を言うようになった：群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。しかし、パリサイ人たちは言った、「彼は、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」。イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。（マタイ 9 章 32～35 節、強調付加）

イザヤ書の次の言葉は、イエスをサタンと結束していると非難した人たちに、まさに当てはまります：「彼らは悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい、暗きを光とし、光を暗しとし、苦きを甘しとし、甘きを苦しとする。災いなるかな、彼らはおのれを見て、賢しとし、みずから顧みて、さととする」（イザヤ書 5 章 20～21 節）。

彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。（ヨハネによる福音書 1 章 10～11 節）

この聖句箇所は単なる古代の歴史を語っているのではありません。神は今もなお、認識されず、誤解され、知られないままです。私たちが神を誤解してしまうのは、神も私たちと

同じように自己中心的だと、誤って思い込んでしまう傾向があるからです：

しかし、自然の人は、神の御霊の賜物を受けいれませんが、それは彼には愚かなことだからである。また、御霊によって判断されることであるため、彼はそれを理解することができません。（コリントの信徒への手紙一 2 章 14 節）

人類は外面的な宗教に惹かれる傾向があります。しかし私たちに必要なのは、自己中心性を神の愛と交換することです。自己中心性を手放すという考えは、「自然の人」にとって非常に脅威的です。外面的な宗教は、より安全に見えるかもしれませんが、その安全は巧みな幻想です。外面的な宗教は、しばしば神から隠れるための手段として用いられるのです。

さてパリサイ人たちが[イエス]に近づいてきて、試みようとして言った、「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないでしょうか」。イエスは答えて言われた、「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ、そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。彼らはイエスに言った、「それでは、なぜモーセは、妻を出す場合には離縁状を渡せ、と定めたのですか」。イエスが言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった。（マタイによる福音書 19 章 3～8 節）

旧約聖書の多くの箇所は、かたくなな人々に近づこうとする神の努力を描いています。神が人々を見捨てず、彼らの意志歩み寄った箇所では、しばしば神が誤解されています。本当に思いやりを欠いているのは私たち人間であって、神ではありません。それにもかかわらず、私たちは旧約聖書における神と無慈悲な人々との関わりを常に誤って読み取っている。その結果、神が奴隷制度や一夫多妻を容認し、征服戦争を奨励し、集団虐殺を命じ、律法違反者に過酷な罰を科したと非難します。しかしそれは、古代イスラエルとの関わりの中で神が絶えず直面していた人間のかたくなな心という問題の深刻さを、私たちが理解していないからです。イエスは山上の説教において律法を拡大解釈し、それを愛の法律に基づいた実践的な教えとして示されました：

『目には目を、歯には歯を』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい。もし、だれかが、あなたをしいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に二マイル行きなさい。求める者には与え、借りようとする者を断るな。（マタイによる福音書 5 章 38～42 節）

イエスはこれらの言葉において、かたくなな人々の意志に合わせるのではなく、神の完全な御心を説き明かされました。

イエスは彼らに言われた、「神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわたしを愛するはずである。わたしは神から出た者、また神からきている者であるからだ。わたしは自分からきたのではなく、神からつかわれたのである。どうしてあなたがたは、わたしの話すことがわからないのか。あなたがたが、わたし

の言葉を悟ることができないからである。あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。しかし、わたしが真理を語っているので、あなたがたはわたしを信じようとしなさい。あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜあなたがたは、わたしを信じないのか。神からきた者は神の言葉に聞き従うが、あなたがたが聞き従わないのは、神からきた者でないからである」。ユダヤ人たちはイエスに答えて言った、「あなたはサマリヤ人で、悪霊に取りつかれていると、わたしたちが言うのは、当然ではないか」。(ヨハネによる福音書 8 章 42～48 節、強調付加)

イエスは宗教指導者たちに言われました、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔の子である。」彼らの父が悪魔であるとされたのは、彼らが悪魔の歪んだ神の像を受け継ぎ、その像へのいかなる変化にも抵抗したからです。

そして、その頭の上の方に、「これはユダヤ人の王イエス」と書いた罪状書きをかかげた。同時に、ふたりの強盗がイエスと一緒に、ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけられた。そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。祭司長たちも同じように、律法学者、長老たちと一緒にあって、嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの

王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい：自分は神の子だと言っていたのだから」。(マタイ 27 章 37～43 節、強調付加)

十字架の上でイエスを嘲笑した者たちは、荒野でサタンがキリストを誘惑したときとまったく同じ言い回しを使いました：「もしあなたが神の子なら」(マタイ 4 章 3 節)。

まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない；もしそんなことをしたら、新しいぶどう酒は皮袋をはり裂き、そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだになるであろう。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入るべきである；そうすれば、両方とも保たれるのである。(ルカによる福音書 5 章 37～38 節)

この例え話において、イエスは自らの革新的な教えを「新しいぶどう酒」が「古い皮袋」を破ってしまうと語られました。イエスは言葉と行動を通して、神の愛の明確な姿を描かれました。それは、イエスが出会った宗教指導者たちが抱いていた神の歪んだイメージ(「古いぶどう酒」)とは鮮明に対照的なものでし。この二つの対照的な見解は混在し得ませんでした。今日においても同様です。暴力的であるという神のイメージは、私たちの心に優しい神を迎えるために、取り除かれなければなりません。

第 12 章

神はどのように滅ぼすのか

神がどのように滅ぼすかを示す最も明白な例の一つは、歴代誌第一に見られます。イスラエルの王サウルは、預言者サムエルを通して与えられた神の助言を無視し、破滅的な道を進み続けました。サウルは忠実な家臣ダビデを何度も殺害しました。ノブの祭司たちを殺害した罪もあり、魔女に助言を求めました。サウルはペリシテ人との戦いで負傷し、捕らえられたらどうなるかと恐怖に駆られていました。「サウルは剣を取り、その上に伏した。」（歴代誌第一 10 章 4 節）と記されています。

聖書がこの悲劇的なサウルの死の記録をどのように締めくくっているかに注目してください：

こうしてサウルは主にむかって犯した罪のために死んだ。すなわち彼は主の言葉を守らず、また口寄せに問うことをして、主に問うことをしなかった：それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデに与えられた。（歴代誌上 10 章 13～14 節）

サウルの死において、神が取られた唯一の行動は、サウルをそのまま自分の道に進ませ、彼自身の行いの結果を経験させることだったことが明らかなです。サウルの死因は自殺であり、他殺ではありません。それにもかかわらず、聖書は神が彼を殺したと記しています。ここで神の行為を表すために用いられた言葉は、辞書的な定義とは明らかに異なる意味で用いられています。これは特殊な例ではありません。次の章では、「怒り」「憤り」「ねたみ」といった聖書の言葉が取り上げられます。聖書は、神の御行や神の御心を表す際、これらの言葉に一般的な用法とはまったく異なる意味で用いているのです。

あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。

—イザヤ書 55 章 6～9 節

第 13 章

神の怒りとはなにか

旧約聖書を読むとき、神の怒りという問題は多くの人々を困惑させます。聖書には神の怒りや憤りに関する記述が数多くありますが、その怒りとは何なのでしょう。この問いに答えるためには、聖書のいくつかの例を考察することが有益でしょう。神の怒りが最初に言及されたのは、モーセにイスラエル人をエジプトの奴隷状態から自由へと導く使命を与えた時です。その時、神が怒りを現すに至った背景には、どのような状況があったのでしょうか。

モーセは主に言った、「ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、しもべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです」。主は彼に言われた、「だれが人に口を授けたのか。話せず、聞えず、また、見え、見えなくする者はだれか...主なるわたしではないか。それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなたの言うべきことを教えるであろう」。モーセは言った、「ああ、主よ、どうか、ほかの適当な人をおつかわしてください」。(出エジプト記 4 章 10～13 節)

モーセはファラオの前に一人で立つことを恐れ、代弁者を求めました。神はどのように応答されたのでしょうか。

そこで、主はモーセにむかって怒りを発して言われた、「あなたの兄弟レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている。見よ、彼はあなたに会おうとして出てきている。彼はあなたを見て心から喜ぶであろう」。(出エジプト記 4 章 14 節)

神はどのように怒りを表されたのか？それは、モーセの望みを叶えることでした。では、神の怒りに言及する他の聖書箇所を見てみよう：

また彼らのうちにいた多くの寄り集まりびとは欲心を起し、イスラエルの人々もまた再び泣いて言った、「ああ、肉が食べたい。モーセは、民が家ごとに、おのおのその天幕の入口で泣くのを聞いた。そこで主は激しく怒られ、またモーセは不快に思った。さて、主のもとから風が起り、海の向こうから、うずらを運んできて、これを宿営の近くに落した。その落ちた範囲は、宿営の周囲で、こちら側も、おおよそ一日の行程、あちら側も、おおよそ一日の行程、地面から高さおおよそ二キュビトであった。そこで民は立ち上がってその日は終日、その夜は終夜、またその次の日も終日、うずらを集めたが、集める事の最も少ない者も、十ホメルほど集めた。彼らはみな、それを宿営の周囲に広げておいた。（民数記 11 章 4, 10, 31～32 節）

この出来事でも、神の怒りが言及されています。では神は何をされたのでしょうか。神は、民が望んだことを与えられました。

サムエルは年老いて、その子らをイスラエルのさばきづかさとした。長子の名はヨエルといい、次の子の名はアビヤと言った。彼らはベエルシバでさばきづかさであった。しかしその子らは父の道を歩まないで、利にむかい、まいないを取って、さばきを曲げた。この時、イスラエルの長老たちはみな集まってラマにおけるサムエルのもとにきて、言った、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください」。しかし彼らが、「われわれをさばく王を、われわれに与えよ」と言うのを聞いて、

サムエルは喜ばなかった。そしてサムエルが主に祈ると、主はサムエルに言われた、「民が、すべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい：彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。」（サムエル記上 8 章 1～7 節）

神は預言者サムエルを通して民に語りかけ、王を立てることが彼らにとって最善ではない理由をいくつも示されました。では、民はサムエルの言葉に耳を傾けたでしょうか。

ところが民はサムエルの声に聞き従うことを拒んで言った、「いいえ、われわれを治める王がなければならぬ。われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」。（サムエル記上 8 章 19～20 節）

民の強い要求に対して、神はどのように応えられたのでしょうか。「主はサムエルに言われた。『彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立てよ』」（22 節）では、神が怒りをもって王を与えられたことを、私たちはどのようにして知のでしょうか。預言者ホセアは、この歴史的な出来事を振り返りながら、神が民の願いに応じて王を与えたことについて、神ご自身の視点からこう語っています：

イスラエルよ、わたしはあなたを滅ぼす；だれがあなたを助けることができよう：あなたを助けるあなたの王は今、どこにいるのか。あなたがかつて「わたしに王と君たちとを与えよ」と言ったあなたを保護すべき、すべてのつかさたちは今、どこにいるのか。わたしは怒りをもってあなたに王を与えた、また憤りをもってこれを奪い取った。（ホセア書 13 章 9～11 節、強調付加）

これら三つの聖書の記述は、神の怒りがイスラエル人の願いに応じて、彼らにとって最善ではないものをあえて与えることと同義であったことを明らかに示しています。このことだけでも、聖書における神の怒りは、一般的な辞書に載っている定義とはまったく異なるものであることを示唆するには十分でしょう。しかし、これだけではありません。イエスが怒りを表されたときには、何が起こったのでしょうか。

イエスがまた会堂にはいられると；そこに片手のなえた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた；すると、イエスは片手のなえたその人に、「立って、中へ出てきなさい」と言い、人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくなさを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。（マルコによる福音書 3 章 1～6 節）

これは、イエスがパリサイ人たちと出会った場面です。彼らの律法主義的な規則では、安息日に癒しを行うことが禁じられていました。イエスは彼らの心を読み、「怒りをもって彼らを見回しました」。では、イエスの怒りとはどのようなものだったのでしょうか。それは、「彼らの心のかたくなさを嘆いていた」と記されています。イエスは、手の萎えた人に対して愛や思いやりを示そうとしない、この冷酷な宗教指導者たちの姿に、深い悲しみと痛みを感じておられたのです。聖書には神の怒りや憤りについて、他にどのようなことが記されているのでしょうか。

神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。（ローマ 1 章 18 節、強調付加）

神の怒りはどのように現れるのか？

ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられた。（ローマ 1 章 24 節、強調付加）

それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた。（ローマ 1 章 26 節、強調付加）

そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったもので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。（ローマ 1 章 28 節、強調付加）

神の怒りはここで、神が彼らを見捨てる、あるいは引き渡すこととして定義されている。一言い換えれば、神から離れる自由を人々に与えることです。これは、私たちが神に対してしばしば抱く復讐的な破壊の怒りとはまったく異なるものです。では、旧約聖書の他の箇所も見てみましょう。

そこで民は立ち上がってその日は終日、その夜は終夜、またその次の日も終日、うずらを集めたが：集める事の最も少ない者も、十ホメルほど集め：彼らはみな、それを宿営の周囲に広げておいた。その肉がなお、彼らの歯の間にあって食べつくさないうちに、主は民にむかって怒りを発し、主は非常に激しい疫病をもって民を撃たれた。（民数記 11 章 32～33 節）

ここでは、神が怒りをもって民にうずらを与えた出来事に戻ります。民の貪欲から生じた当然の結果として、「主は民を非常に激しい疫病で打たれた」のです。

注目すべき点は、イスラエル人が野営していた砂漠環境では、大量の新鮮な鶏肉は長持ちしないということです。肉はすぐに腐敗し、人が食べるには不適切なものとなってしまいます。この事実を考えると、どのような疫病が起こった可能性が高いのでしょうか。適切な微生物と条件が揃えば、食中毒は命に関わる深刻な病となります：「これによって、その所の名はキブロテ・ハッタワと呼ばれた。欲心を起した民を、そこに埋めたからである。」（34 節）では、「主の怒り」とは何だったのでしょくか。それは、神が因果関係に基づく出来事に介入されなかったことだと考えるのは、理にかなっているのではないのでしょうか。

その日には、わたしは彼らにむかって怒りを発し、彼らを捨て、わたしの顔を彼らに隠すゆえに、彼らは滅ぼしつくされ、多くの災と悩みが彼らに臨むであろう。そこでその日、彼らは言うであろう、『これらの災がわれわれに臨むのは、われわれの神がわれわれのうちにおられないからではないか』。しかも彼らがほかの神々に帰して、もろもろの悪を行うゆえに、わたしはその日には必ずわたしの顔を隠すであろう。（申命記 31 章 17～18 節）

神が顔を隠されるとはどういう意味でしょうか。「これらの災いが私たちに降りかかったのは、われわれの神が私たちの中におられないからではないか。」この言葉もまた、神の非介入を表す表現です。神はなぜ顔を隠すと言われたのでしょうか。「彼らがほかの神々に帰して、もろもろの悪を行うゆえに。」その結果はどうなるのでしょうか。「彼らは滅ぼしつくされ、多くの災と悩みが彼らに臨むであろう。」民が他の神々に心を向けたとき、彼らは真の神から離れたことになり、神は彼らを守ることができなくなりました。

イスラエルの人々は主の目に悪とされることを行い、バアルに仕えるものとなった：彼らは自分たちをエジ

プトの地から導き出した先祖の神、主を捨て、他の神々、周囲の国の神々に従い、これにひれ伏して、主を怒らせた。彼らは主を捨て、バアルとアシュトレトに仕えたので、主はイスラエルに対して怒りに燃え、彼らを略奪者の手に任せて、略奪されるがままにし、周りの敵の手に売り渡された。彼らはもはや、敵に立ち向かうことができなかった。（士師記 2 章 11～14 節）

この箇所は、人々が主から離れ続けている様子を描いています。ここで神は「彼らを略奪者の手に渡し」そして「敵の手に売られた」と記されています。これは、危機に対する神の受動的な応答です。彼らの背信のゆえに、神はイスラエルの地に敵が侵入するのを防ぐことができませんでした。

その後主はイスラエルを撃って、水に揺らぐ葦のようにし、イスラエルを、その先祖に賜ったこの良い地から抜き去って、ユフラテ川の向こうに散らされるでしょう。彼らがアシラ像を造って主を怒らせたからです。主はヤラベアムの罪のゆえに、すなわち彼がみずから犯し、またイスラエルに犯させたその罪のゆえにイスラエルを捨てられるでしょう。（列王記上 14 章 15～16 節）

ここで神の怒り（と懲らしめ）は、背信したイスラエルを見放すことです。

彼らは高き所を設けて神を怒らせ、刻んだ像をもって神のねたみを起した。神は聞いて大いに怒り、イスラエルを全くしりぞけられた：神は人々のなかに設けた幕屋なるシロのすまいを捨て、その力をとりことならせ、その栄光をあだの手にわたされた。神はその民をつるぎにわたし；その嗣業にむかって大いなる怒りをもらされた。（詩篇 78 章 58～62 節）

ここでの怒りの定義には：見捨てること、捕囚に引き渡すこと、手放すことが含まれています。

それゆえ、主の怒りがその民にむかって燃え、その嗣業を憎んで、彼らをもろもろの国民の手にわたされた。彼らはおのれを憎む者に治めた。（詩篇 106 章 40～41 節）

神の怒りはここで「彼らを異邦人の手に渡された」として表現されています。

わずかな憤りをもって、しばしわが顔を隠したけれども、とこしえのいつくしみをもって、あなたをあわれむ」とあなたをあがなわれる主は言われる。（イザヤ書 54 章 8 節）

この箇所では、「わずかな怒り」とは、神が「しばらくの間」顔を隠されることとして定義されています。しかし、神の慈しみと憐れみは、永遠に続くものです。

そしてわたしは、あなたがたのすべての兄弟、すなわちエフライムのすべての子孫を捨てたように、わたしの前からあなたがたをも捨てる。主は言われる：彼らが怒らせるのはわたしなのか。自分たち自身ではないのか。そして自らうろたえている。それゆえ主なる神はこう言われる；見よ、わたしの怒りと憤りを、この所と、人と獣と、畑の木と、地の産物とに注ぐ。怒りは燃えて消えることがない」。（エレミヤ書 7 章 15,19～20 節）

神は問いかけられます。「彼らはわたしを怒らせるのか。... いや、彼ら自身が自分の顔を恥で覆うようなことをしているのではないか。」人々の苦しみは、神による罰ではなく、彼らの偶像礼拝の結果として自ら招いたものでした。

あなたの髪の毛を切って捨てよ、裸の山の上に嘆きの声をあげよ。主が、お怒りになっている世の人を退け捨てられたからだ。（エレミヤ書 7 章 29 節、強調付加）

同様の表現を用いた聖書箇所は他にもありますが、ここまで見てきたものだけでも、神の怒りとは神ご自身による罰ではない、という強い根拠となるでしょう。神は、私たちがご自身を受け入れるか拒むかの自由を与えておられます。神の怒りとは、私たちが誤った選択をしたときに生じる、自然な結果なのです。神の役割は常に受動的なものであり、「見捨てる」「御顔を隠す」「委ねる」「手放す」「渡す」といった表現で示されます。

モーセの前で宣言されたとき、神は御自身の性質として怒りや憤りを列挙されなかった。：「主は彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代におよぼす者』」（出エジプト記 34 章 6～7 節）。

民は神とモーセとにむかい、つぶやいて言った、「あなたがたはなぜわたしたちをエジプトから導き上って、荒野で死なせようとするのですか。ここにはパンもなく、水也没有せん。わたしたちはこの粗悪なパンはいやになりました」。そこで主は、火のへびを民のうちに送られた。へびは民をかんだので、イスラエルの民のうち、多くのものが死んだ。（民数記 21 章 5～6 節）

この箇所では、人々の不満に応じて「火のへびを民のうちに送られた」と記されています。これまで見てきた聖書の証

言と照らし合わせると、神が蛇を“送られた”とき、神の御業はどのようなものだったのでしょうか。これまで検討した他の聖書箇所と調和して、神は人々の反抗的な恩知らずな態度に迫られ、彼らに対する御自身の保護的な介入から解放することを余儀なくされたのです。

そもそも火の蛇はどのようにしてそこに現れたのでしょうか。[あなたの神、主]は、あなたをあの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通りに導き；あなたのために堅い岩から水を出した。（申命記 8 章 15 節、強調付加）。

火の蛇は最初からそこに存在し、神があのような過酷な荒野でイスラエル人を奇跡的に守った数多くの危険の一つでした。神が火の蛇を送られたという記述は、もし神が代わりに飢えたホッキョクグマを送り込まれたのであれば、それは確かに問題となるでしょう。

聖書には、神が侵略軍や災いを人々に送ったという記述が数多くあります。この理解に基づけば、神が何か有害なものを送ったとされるすべての聖書の記述は、神が因果関係の操作者とならなければ、それが起こるのを防ぐことができなかったことを意味すると、合理的に結論づけることができます。人間社会を支配することは、神の目的でもなく、神の本質にもそぐわないのです。

その時主は自分の地のために、ねたみを起し、その人々をあわれまれた。主は答えて、その民に言われた「見よ、わたしは穀物と新しい酒と油とをあなたがたに送る。あなたがたはこれを食べて飽きるであろう。わたしは重ねてあなたがたにもろもろの国民のうちでそしりを受けさせない。（ヨエル書 2 章 18～19 節）

そこで、わたしと語る天の使は言った、『あなたは呼ばわって言いなさい。万軍の主はこう仰せられます、

わたしはエルサレムのため、シオンのために、大いなるねたみを起している。（ゼカリヤ書 1 章 14 節）

わたしは神の熱情をもって、あなたがたを熱愛している。あなたがたを、きよいおとめとして、ただひとり男子キリストにささげるために、婚約させたのである。ただ恐れるのは、エバが蛇の悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである。（コリントの信徒への手紙二 11 章 2～3 節）

神のねたみは、完全に無私です。神は他者のためにねたみを抱かれ、決してご自身のためにではないのです。

主は再びイスラエルに向かって怒りを発し、ダビデを感動して彼らに逆らわせ、「行ってイスラエルとユダとを数えよ」と言われた。そこで王はヨアブおよびヨアブと共にいる軍の長たちに言った、「イスラエルのすべての部族のうちを、ダンからベエルシバまで行き巡って民を数え、わたしに民の数を知らせなさい」。ヨアブは王に言った、「どうぞあなたの神、主が、民を今よりも百倍に増してくださいますように。そして王、わが主がまのあたり、それを見られますように。しかし王、わが主は何ゆえにこの事を喜ばれるのですか」。しかし王の言葉がヨアブと軍の長たちとに勝ったので、ヨアブと軍の長たちとは王の前を退き、イスラエルの民を数えるために出て行った。（サムエル記下 24 章 1～4 節）

ダビデがイスラエルの人々を数えたとき、人間の数や軍事に頼ってイスラエルを守ろうとすることで、神への誇りと不信感を示しました。この行為は、神による非暴力的な守りを事実上排除することとなり、人々を敵やその他の脅威に対して無防備な状態にさらす結果となりました。戦場を熟知し

たヨアブでさえ、王の命令に危険を感じ、イスラエルの人口を数えることについて王に問いました。

神は「ダビデを彼らに立ち向かわせた」。この箇所を文字通り理解することに問題はないでしょうか。神がダビデの耳元で「イスラエルを数えよ」と囁き、彼らに背く正当な理由を与えるつもりだったのでしょくか。神の御業についてこれまで学んできたことを踏まえて、この聖句を見てみましょう。

神は破壊に積極的に関与されることはなく、悪を引き起こすこともありません。しかし、それを行う者がいます。この出来事において、神がダビデを阻止せずにイスラエルの人々を数えに行かせたことで神がダビデを「動かされた」可能性はあるでしょうか。そして、ダビデの耳元で囁いたのが神ではなくサタンだったと考えるのは、行き過ぎた解釈でしょうか。このような同じ出来事は、歴代誌第一の記述で読むことができます：「サタンがイスラエルに敵対して立ち上がり、ダビデをそそのかしてイスラエルを数えさせた」（歴代誌第一 21 章 1 節）とあるのです。

私たちは、聖書がすべての出来事について、なぜ率直に事実を明言しないのかと疑問に思うかもしれません；そうすれば聖書の研究はもっと簡単になるでは。確かにそうです。しかし、神と人類との間のコミュニケーションの問題は、神の理解力の欠如によるものではなく、私たちの理解力の欠如によるものです。神はその知恵により、私たちに神についての真理を受け入れるか拒むかの選択を与えておられます。聖書はこの重要な原則を念頭に置いて書かれています。私たちが神についての救いの真理を理解する機会を得ながら、それを拒むなら、さらなる光は私たちを神からさらに遠ざけることになります。聖書の表面的な曖昧さは、そのために、反対の解釈を許容しているのです。神は、私たちの意志に反して、ご自身とその妥協のない愛を信じさせようとはされません。

同時に、聖書は、優しい神を求める者がその方を見出すことができるよう、豊富な証拠を提供しています。

あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば。

—エレミヤ書₂₉章₁₃節

第 14 章

神はどのように戦われるか

神は、悪に対して、真理、愛、あわれみ、そして赦しをもって戦われます。

罪を犯す者は、悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。（ヨハネの手紙一 3 章 8 節）

悪魔が反逆を始めた時からの働きは、神を告発し、誤って描くことでした。神の御子イエスは、悪魔の告発が偽りであることを示し、悪魔の働きを打ち砕かれました。

どうしてあなたがたは、わたしの話すことがわからないのか。あなたがたが、わたしの言葉を悟ることができないからである。あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。（ヨハネによる福音書 8 章 43～44 節）

イエスは、悪魔の主な武器が偽りを使うことを明言されています。「偽ることのあり得ない神」（ヘブル人への手紙 6 章 18 節）とあるように、神は真実をもって悪魔の偽りと戦われます。

悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。

それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。（エペソ 6 章 11～17 節）

イエスは、神の武具の使い方を私たちに示されました；それは、神についての真実の福音（「真理の帯を腰にしめ」）、契約に対する神の誠実さの成就（「正義の胸当て」）、天の父との和解のメッセージ（「平和の福音の備え」）、神の信頼性への確信（「信仰のたて」）、そしてサタンとその偽りから解放された者への永遠の命の約束（「救いのかぶと」）です。また、私たちはイエスが用いられた同じ武器、神の言葉（「御霊の剣」）を取るよう奨励されています。

愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである」。悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。（ローマ 12 章 19～21 節）

神の復讐とは何でしょうか。神は悪に善をもって打ち勝ち、神の子どもたちにも同じことを求めておられます。敵に報復するのではなく、親切に接することは、彼らの頭の上に「燃える炭」を積むことに例えられます。敵に報いることは、悪に打ち負かされることです。しかし、悪に効果的に打ち勝つ

方法があります—それは「善をもって」です。それが、神の戦い方なのです。

そのとき、イエスは言われた、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。（ルカによる福音書 23 章 34 節）

イエスの言葉は、私たちのために語られたものです。父なる神は、赦すために説得される必要などありません。問題は神ではなく、私たちにあるのです。私たちは、神が自分たちのような存在だと思い込んでいます。イエスが「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか分からずにいるのです」と語られたとき、それは十字架に架けた人々のためだけでなく、私たちのためにも語られたのです。神は、私たちが置かれている状況（自分が何をしているのか分かっていないこと）を理解しておられることを、私たちに知ってほしいと願っておられます：神は今もなお、私たちを無条件に愛し、私たちを救うために絶えず働いておられるのです。

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。

—ガラテヤ人への手紙 5 章 22 節～23 節

第 15 章

ソドムとゴドラ

ソドムとゴモラの滅びは、怒れる神が悪しき人々に死と破壊を降り注がれる典型的な例として考えられています。聖書の記述を文字通り受け取れば、次のようなことが起こっているように思われます：二つの都市は、農業と交易の地域に位置しており、住民の生活は比較的快適になります。人々には多くの余暇があり、神を敬わない行いが日常的になります。神は天から見下ろし、人々の悪の深さに怒りを覚えられます。しばらくの間、神は何の行動も起こされませんが、ついに墮落が極まり、神の忍耐が尽きます。神は義人であるロトとその家族に、ソドムを離れるよう警告を送られます。そして、壮絶な怒りの表れとして、神は天から火と硫黄を降らせられます。男も女も子どもも、恐ろしい死を遂げます。ソドムとゴモラは完全に滅ぼされ、神の復讐は満たされます。

では、この同じ出来事を、神は破壊に積極的に関与しないという理解のもとで、改めて見てみましょう。自己中心的な住民が繁栄と快樂に浸る二つの都市を思い浮かべてください。「見よ、あなたの妹ソドムの罪はこれである。すなわち彼女と、その娘たちは高ぶり、食物に飽き、安泰に暮していたが、彼らは、乏しい者と貧しい者を助けなかった。」（エゼキエル書 16 章 49 節）。人々は、自分たちの都市（地質的に不安定な場所に建てらた）の地下で爆発的な力が蓄積されつつあることに気づいていません（創世記 14 章 10 節参照）。また、彼らが拒絶する目に見えない神が、これまで災いから彼らを守ってきた同じ神であることにも気づいていません。ついに神が彼らが神から独立したいという願いを認めざるを得ない日が訪れます。彼らの自由を尊重するため、神は仕方なく彼らを手放し、制御できない自然の力から守ることなく送り出すのです。地表の下の裂け目が突如として裂け上がり、数千

フィートの高さまで溶岩が噴き上がり、「主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせた」（創世記 19 章 24 節）とあるように、ソドムとゴモラは瞬く間に滅ぼされます。

神が二つの都市を滅ぼしたという行為は、住民たちに真の自由を与えたのです—それは、破滅的な結果をもたらす選択をする自由も含まれていました。「わたしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのかいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につき従わなければならない。そうすればあなたは命を得、かつ長く命を保つことができる。」（申命記 30 章 19-20 節）。

病気、事故、死、戦争、自然災害などは、さまざまな理由で起こります。多くの場合、私たちが直接的な原因であり、時にはサタンが関与し、また時には洪水後の自然の力が引き起こすものもあります。より頻繁に、これらの要因が複雑に絡み合っているのです。しかし、私たちは苦しみの原因が何故起こったかはっきりと見極めることができないため、神を責める傾向にあります。それは公平でしょうか。それは理にかなっているでしょうか。責任転嫁の傾向は、古くから存在しています。では、責任回避はいつ、どこで始まったのでしょうか。「人は答えた、『わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです』。そこで主なる神は女に言われた、『あなたは、なんということをしたのです』。女は答えた、『へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました』。」（創世記 3 章 12-13 節、強調付加）。

主よ、あなたのいつくしみは天にまで及び、あなたのまことは雲にまで及ぶ。あなたの義は神の山のごとく、あなたのさばきは大きな淵のようだ。主よ、あなたは人と獣とを救われる。神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょう。人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得る。

—詩篇 36 篇 5～7 節

第 16 章

洪水についてはどうか

ノアの時代の洪水についてはどうでしょうか。もし神が破壊者ではなければ、世界最大の大災害が起こったのは何だったのでしょうか。この世界最大の洪水を引き起こした理由について、聖書やその他の資料から、納得のいく説明を与えてくれる証拠を見つけることはできるでしょうか。

そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であろう」。(創世記 6 章 3 節)

神は、やがて人類が自ら遠く離れてしまい、そのとき神は、自然の力を支えていた手を緩め、人類を手放さざるを得なくなるだろうと見越していたのでしょうか。いったい何が神に手を離す決断をさせたのでしょうか。それは神が計算された上で下した決断だったのでしょうか、それとも別の要因が関わっていたのでしょうか。

あなたの隣人が、いくつかの個人的な問題を抱えている人がいると想像してみてください。彼は経済的に苦しみ、健康面でも複数の問題を抱え、自宅から数ブロック以上歩くことができません。さらに、車を持っていないため、用事を済ませたり必要なものを手に入れたりするのが困難です。

ある日、彼との会話の中で、交通手段がないことを知り、あなたは食料品店やその他の場所まで車で送ってあげてを申し出ます。その後数か月の間、あなたは彼を自分の車で、病院の予約や薬局、スーパーマーケットなどへ連れて行ってあげます。この取り決めはうまくいっているようで、あなたも彼を助けることができ嬉しく感じています。

ある暑い夏の日、この同じ隣人が興奮した様子であなたの玄関に現れ、町の向こう側にある銀行まで車で送ってほしいと頼んできます。あなたは彼が紙袋、スキーマスク、そして靴下に包まれた拳銃のようなものを持っていることに気づきます。あなたならどうしますか。車の鍵をつかんで、喜んでドアを飛び出し、友人を目的地まで送り届けて戻ってくるでしょうか。

私たちすべての人間には、決して越えたくない一線があります。それは道徳的、倫理的、そして個人的な境界に関わるものです。神にもまた、彼は越えない—あるいは越えられない—一線があると考えるのは、合理的なことではないでしょうか。

主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。（創世記 6 章 5,11～13 節）

洪水の直前、私たちの世界はどのような状態だったのでしょうか。神はノアに、「彼らは地を暴虐で満たした」（13 節、強調付加）と明らかにされました。人類の暴力によって、地そのものが暴力を蓄えていたのです。そして、非常に激しい力が、やがて訪れる大災害の中で解き放たれることとなりました。人間社会は道徳的に崩壊していました：「神が地を見られると、見よ、それは墮落していた；すべての肉なる者が地上でその道を墮落させていたからである。」

この歴史上の特に暗い時代に、神に忠実な者は何人いたのでしょうか。聖書にはノアだけが言及されています。この悲

しい状況をもたらしたのは何だったのでしょうか。人類の思いは「絶えず悪だけ」だったのです。聖書は「悪」をどのように定義しているのでしょうか。アダムとイヴが「善悪の知識の木」（創世記 2 章 17 節）の実を食べたとき、神の善に対する彼らの認識の変化こそが、**悪とは何かの定義そのものです**。私たちの最初の両親が抱いた、優しい神に対する歪んだイメージが、世界が受け継いだものなのです。洪水前の暴力的な住人たちは、神が自分たちの暴力を容認していると考えていました。神の反応はどうだったのでしょうか。「神は心を痛められた」（創世記 6 章 6 節）。

人類は、自らが暴力の非自発的な参加者にならなければ越えられない一線まで神を追い込んでしまいました。神は、自然界を保っていた手を緩めざるを得なくなりました。120 年の期間が終わり、乗客たちが無事に箱舟に乗り込んだとき、雨が降り始めました。それは 40 日 40 夜にわたって激しく降り続けました。何がこの大洪水を引き起こしたのでしょうか。その重要な手がかりは、創世記の第 1 章に見いだされます：

神はまた言われた、「水の間に大空があって、水と水とを分けよ」。そのようになった。神は大空を造って、大空の下の水と大空の上の水とを分けられた：そしてそのようになった。神はその大空を天と名づけられた（創世記 1 章 6～8 節）

天空とは、何でしょうか。天空とは、広がり、天蓋、またはドームを意味します。ドームとは、天または大気中に吊るされている、あるいは固定されている地球上の覆いのことです。この聖句はさらに、このドームが水を分けるものとして描かれており、ドームの上には大量の水があることが記されています。

大気中の水蒸気が、巨大な温室のように地球全体を覆い、北極から南極まで、世界は均一で穏やかな熱帯気候に保たれ

ていたのです。温暖な気候に生息していた植物や動物の化石が極地で発見されており、かつて地球にそのような気候が存在していたことを示す証拠となっています。聖書もまた、初期の地球の気候について重要な手がかりを与えています：

これが天地創造の由来である。主なる神が地と天とを造られた時、地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。しかし地から泉がわきあがって土の全面を潤していた。（創世記 2 章 4～6 節）

これらの聖句は、私たちが今日慣れ親しんでいる世界とはまったく異なる世界を示唆しています。「主なる神は地に雨を降らせておられなかった...しかし、地から霧が立ち上り、地の全面を潤していた。」地球は湿っていて暖かく、非常に均一な気候で、急激な気温変化はありませんでした。このような安定した気温では、雷雨、竜巻、ハリケーン、雹、雪がなく、そしておそらく雨も降らなかったでしょう。また、地表自体も、現在のように険しい山々や深海の峡谷があるのではなく、はるかに平坦だった可能性があります。さらに、地球の表面の水で覆われている部分は、現在よりずっと少なかったと考えられます。

何が大気中にすべての水を保持していたのでしょうか。そして、何が大洪水を引き起こす発端となったのでしょうか。私たちは、熱が水を上昇させることを単純な観察から知っています。コンロの上で沸かしたやかんの水は、蒸気となって注ぎ口から出ていきます。地球上の水域は、毎日膨大な量の水分子を放出しています。加えられる熱が多ければ多いほど、水分子は早く逃げ出します。真冬の凍った湖の表面から蒸発する水分子は、暑い夏の日に比べてかなり少ないのです。

もし洪水以前に、より多くの熱エネルギーが存在していたとしたら、それは大気中により多くの水分を保持することを可能にしていたのではないのでしょうか。地球は、ほぼすべての熱エネルギーを太陽から得ています。もし太陽がなければ、地球は極度に凍結し、地表の温度は絶対零度に近づいてしまうでしょう。

神がこの世界を創造されたとき、神は大気中に大量の水を保持できる、驚くほど精密な熱エネルギーの仕組みを作動させました。この仕組みの運用において、太陽は重要な役割を果たしていたことでしょう。また、洪水以前の太陽は、現在よりも多くの熱を放出していたと考えるのも合理的です。もしそれが事実であるならば、神が自然界への支配を緩めざるを得なくなったとき、太陽のエネルギー放出にも影響が及んだと考えるのは妥当でしょう。

大気の微妙な均衡が崩れ、「それはノアの百六歳の二月十七日であって、その日に大いなる淵の源は、ことごとく破れ、天の窓が開けて、雨は四十日四十夜、地に降り注いだ。」（創世記 7 章 11～12 節）。歴史上初めての雨粒が降り始め、やがて何千立方マイルもの水が地上に注ぎ込まれました。

地質的な不安定さが大気的不安定さと重なり、地下の貯水層の水圧が高まりました。「その日に大いなる淵の源は、ことごとく破れた」（創世記 7 章 11 節）。これらの「噴水」は、大洪水にさらに多くの水をもたらしたのです。

箱舟に乗っていた八人だけが、洪水を生き延びました：ノアとその家族です。また、洪水後に各種の動物で世界を再び満たすために、多くの動物の種も巨大な船に乗っていました。

箱舟の化石化した遺骸は、トルコ東部の小さな町ドウバヤズィットの近くにある、箱舟の遺跡に捧げられた国立公園に保存されています。アララト山脈でのこの驚くべき考古学的発見は、聖書に記された大洪水の物語が単なる作り話ではな

く、世界規模の自然災害に関する信頼できる歴史であることを示す説得力のある証拠です：

それで水はしだいに地の上から引いて、
百五十日の後には水が減り、箱舟は七月
十七日にアララテの山にとどまった。

—創世記 8 章₃～₄ 節

第 17 章

十字架の証

旧約聖書における神の行動を正しく理解することによって、私たちは、神は破壊しないことを確信できます—いかなる状況においても。しかし、神が罪人を滅ぼすために近づかないという最も説得力のある証拠は、新約聖書にあります。

イエスが私たちのために十字架で死なれたという信仰は、聖書を学ぶ人々の間でほぼ普遍的に受け入れられていますが、イエスの死が私たちをどのように救うのかについては、見解の違いがあります。それでも、多くの人々は、イエスが十字架で死なれたとき、彼は私たちが経験することになる運命を自己犠牲的な介入を持って彼自身が経験したと信じています。

もしこれが真実であるならば、神が死をもたらすために“行う”ことに関連して、イエスは私たちが死ななければならぬ方法と同じであると考えるはずですが。もし神が罪人を滅ぼすと信じるならば、神である父がイエスに近づいて彼を殺したと予想することになります。では、実際にはどうだったのでしょうか。マタイによる福音書は、キリストの十字架刑について詳細に記録しています。

イエスは死の直前にどんな最後の言葉を語ったのでしょうか。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイによる福音書 27 章 46 節、強調付加）

この聖句は、イエスがどのように死なれたかを明らかにしています。神である父は、ご自身の御子に、神の愛を拒むすべての人が最終的に経験すること—すなわち、命の源である神からの分離—を経験させられました。神である父がイエスを殺したのではありません—私たちの罪がそうしたのです。

「罪の支払う報酬は死である」（ローマ 6 章 23 節）。罪は、神の助けがなくても、それ自体で死を引き起こす力を十分に

持っています。すべての命は神から来ており、例外はありません。すべての死は罪の結果であり、これにも例外はありません。神が死の源であると考えすることは、*非論理的*であり、例外はありません。

この小さな文書の中で、神に起因するすべての破壊や苦しみの記録を検討することはできません。しかし、私たちがこれまでに見てきた聖句は、聖書における死と災害に対する神の役割を正しく理解するための鍵となります。聖書は聖書を解釈します。ある聖句が、神の行動を明確に示している場合、他の曖昧な聖句（たとえば、二つの聖句が矛盾しているように見える場合）を理解する手掛かりとして使うことができます。さらに、神ご自身がご自分について語られる言葉は、特別な配慮に値します。例えば、「わたしは主であり、変わることはない」（マラキ書 3 章 6 節）。最後に、イエスが教え、示された神の真理は、創世記から黙示録に至るまで聖書全体を読み解くための正確な道しるべとなるのです。

信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

—エフェソの信徒への手紙 3 章 17～19 節

第 18 章

神は暴君ではない

永遠に燃え続ける地獄という教義に触れたことのあるすべての人にとって、素晴らしい知らせがあります。この教義は、聖書を徹底的に研究することで裏付けされるものではありません。聖書は、死を無意識の状態として描いています。それは一時的な眠りであり、復活の時まで続くものです。その後、神との和解を拒んだすべての人は、その自然な結果として、永遠の非存在を受けることになるのです。

聖書の中に、永遠に燃え続ける苦しみのある場所を支持する根拠を見出そうとするならば、それは象徴的な意味である言葉を文字通りに解釈する必要があります。火という言葉には、文字通りの意味と象徴的な意味の両方があります。ダニエル書では、ネブカドネザルがシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを燃える炉に投げ込んだとき、それは明らかに彼らが経験した文字通りの火でした。水で洗礼を施したヨハネが、キリストは聖霊と火で洗礼を行うだろうと言ったとき、火は明らかに文字通りの火ではなく、比喩的に火という言葉を使っていたのです。

「私たちの神は焼き尽くす火である」と「神は愛である」（ヘブル 12 章 29 節、ヨハネ第一 4 章 16 節）。これらの神についての断定的な二つの言葉は、矛盾しているのでしょうか。それは、火を文字通りの火と考える場合に限られます。火とは化学反応です。神が化学反応であるのでしょうか。これらの言葉は、神の愛が人に及ぼす影響を理解すれば、完全に調和しています。神の愛は、利己心を焼き尽くします。利己心は、真の愛の反対です。もし私たちが神の愛に心を開くならば、その愛は私たちの心の中に入り、致命的な利己心を消し去るのです。これは、命を与える経験なのです。

もし私たちが神の愛に抵抗し、代わりに自分自身の利己心に固執するならば、その同じ愛は苦しみの源となるでしょう。私たちは神から離れようとし、さらには逃げたり隠れたりするようになるでしょう。それは、アダムとエバが神についての蛇の嘘を信じた後に経験したことでした。このように理解すると、神の愛は焼き尽くす火であることがわかります。

イエスが語られた金持ちとラザロのたとえ話は、しばしば文字通りの苦しみの場所の教義を支持するために使われることがあります：

ある金持ちがいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという貧しい人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのぐと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧しい人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをおつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいます

ので、こんな苦しい所へ来ることがないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであらう』」。 (ルカ 16 章 19～31 節)

イエスはこのたとえ話を、利己心と無関心が人に与える影響を示すために語られました。イエスが語りかけていたのは、自分を義とするパリサイ人たちであり、彼は、死後の世界についての一般的な誤解をこのたとえ話に盛り込まれたのです。

ユダヤ人たちは、富を神の祝福と結びつけて考えていました。彼らの考えでは、貧しい人、特に身体に何らかの障害を抱えている人は、神に呪われているとされていました；つまり、その人がそのような境遇にあるのは、霊的な欠陥や罪のせいだと見なされていたのです。一方で、裕福な人は神の特別な恵みを受けていると確信されていました。パリサイ人の考え方では、人の富や地位は、その人が神の前に正しく立っていることの尺度だったのです。イエスはこのたとえ話を通して、この狭量で残酷な視点の誤りを明らかにされました。

まず、物語のいくつかの詳細を見てみましょう。死後、乞食のラザロは「アブラハムのふところ」で安らかに過ごしていました。一方、金持ちも死に、地獄で苦しみにあえいでいます。彼は上を見て、遠くにアブラハムとラザロの姿を目にします。そして、金持ちと「父アブラハム」との会話が交わされます。

それでは、いくつかの思慮深い質問を投げかけながら、この物語を慎重に見ていきましょう：

- この物語の中で、アブラハムとラザロはどこにいますでしょうか。
- もしアブラハムとラザロが天国や楽園にいたのだとしたら、地獄にいる金持ちと会話ができるのはなぜでしょうか。また、金持ちが彼らの姿を見ることができるのはどうしてでしょうか。
- もしアブラハムとラザロが地獄にいたのだとしたら、彼らはそこで何をしているのでしょうか。
- もしアブラハムとラザロが天国でも地獄でもない場所にいたのだとしたら、彼らはどこにいたのでしょうか。
- 燃えさかる地獄で苦しんでいる人にとって、舌に数滴の水が与える慰めとは、どれほどのものなのでしょうか。
- ラザロは、地獄で苦しむ金持ちの姿を見ることができ、彼の嘆願を聞くことができるのでしょうか。
- ラザロは、「アブラハムのふところ」でどのように慰められているのでしょうか。
- ラザロは、金持ちの苦しみを知りながらも慰められているのでしょうか。それとも、その苦しみを知っているからこそ慰められているのでしょうか。
- 立場が逆転した今、ラザロは金持ちに対して冷淡な無関心を持つように促されているのでしょうか。
- 二つの場所の間の移動を妨げる「大きな隔たり」は、どれほどの広さなのでしょうか。
- 地獄とアブラハムとラザロのいる場所との間で、会話を防ぐためには、この「大きな隔たり」はどれほどの広さである必要があるのでしょうか？
- 地獄で苦しんでいる人々の苦しみを、快適の側にいる人々が認識できないようにするには、この大きな隔たりはどれほどの広さである必要があるのでしょうか？

300 ヤード？300 マイル？それとも、宇宙は十分にひろいでしょうか。

- 金持ちとラザロのたとえ話で、イエスが地獄に言及されたことから、「永遠に燃え続ける地獄」という教義を支持していると結論づけるのは妥当でしょうか。

イエスがこの恐ろしい教義を支持するためではなく、それを打ち破るために、自身のたとえ話の中で常に燃え続ける苦痛の場という概念を持ち込んだと結論付ける方が、より合理的に思いませんか。イエス、もし宇宙のどこかに文字通りの地獄が存在するなら、永遠に生きる者たちが完全な平安と真の幸福を得ることなど不可能だということを教えようとされたのはだったのではないのでしょうか。

永遠の苦しみが存在するという教義は、私たちの優しく、慈悲深く、許し深く、愛に満ちた神を最悪の暴君のように描くサタンの嘘であり、私たちを天の父から遠ざけるために仕組まれたものです。永遠の苦しみ場所など、決して存在しません。聖書は、すべての苦しみが一永遠に終わる日が来る、と語っているのです：

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

(啓示録 21 章 3～4 節)

多くの人が、私たちは永遠にどのような形で生きるのかをよく疑問に思います。今のような人間の身体を持っているのでしょうか。それとも、身体のない存在として生きるのでしょうか。そして、魂とは何なののでしょうか。

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。(創世記 2 章 7 節)

罪を犯した魂は必ず死ぬ。(エゼキエル書 18 章 4 節)

私たちの命には、神からの「命の息」、すなわち霊が必要です。私たちは「生きた魂」を所有しているのではありません。一人ひとりが生きた魂そのものなのです。分離可能な不死の魂を持っているという信仰は、聖書によって支持されていません。キリストの再臨の際、私たちの不完全な身体は「瞬く間に」(コリント第一 15 章 52 節)完全なものへと変えられます。

罪の支払う報酬は死である。(ローマ人への手紙 6 章 23 節)

神の言葉の中で、死が死以外のものとして描かれている箇所はありません。聖書全体を正しく理解すれば、罪の結果は死であることが断言されています。ただ一つの異なる声があるとすれば、それは「蛇が女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう』」(創世記 3 章 4 節、強調付加)です。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネによる福音書 3 章 16 節)

滅びるという言葉は、存在しない状態になることを意味します。どこか別の場所で苦しみながら存在し続けることを意味しているのではありません。

イエスは彼らに言われた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。すると弟子

たちは言った、「主よ、眠っているのですしたら、助かるでしょう」。イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが：弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザロは死んだのだ。」

イエスは、死を眠りにたとえられました。それは、神が人を死からよみがえらせることができるになるからです。イエスがラザロを墓に葬られてから四日後に生き返らせたとき、ラザロは天から呼び戻されたものではありません。彼は意識のない状態—死—から目覚めたのです。

その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる。（詩篇 146 篇 4 節）

死とは、思考や意識がどこかで続いていくものではありません。

死においては、あなたを覚えるものではなく、陰府においては、だれがあなたをほめたたえることができますようか。（詩篇 6 篇 5 節）

生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない。（伝道の書 9 章 5 節）

私たちが死ぬとき、その瞬間にすべての認知機能が停止し、時間の経過に対する意識も含めてなくなります。復活の瞬間は、最後の息を引き取った直後に訪れるように感じられるでしょう。

すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえる。（テサロニケ人への第一の手紙 4 章 16 節）

この復活はキリストの再臨の時に起こるでしょう。

「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えて来る。
(黙示録 22 章 12 節)

私たちは、イエスが二度目に来るまで永遠の報酬を受け取ることはありません。

祝福に満ちた、ただひとりの力あるかた、もろもろの王の王、もろもろの主の主が；ただひとり不死を保つ方。（テモテへの手紙一 6 章 15～16 節）

神のみが不死であり、私たちはそうではありません。

ここで、あなたがたに奥義を告げよう；わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。死は勝利にのまれてしまった。

（コリント人への第一の手紙 15 章 51～54 節）

私たちは、自分自身において不死を持っているわけではありません。不死は、神との生きたつながりを通してのみ可能です。「この死すべき者は、不死を着なければならない」とあるように。パウロもまた、「私たちすべてが眠るわけではない」と宣言しています。キリストにあって生きている者は、再臨の時に死を経験することはありません。

おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて；小さいわらべに導かれ、雌牛と熊とは食べ物を共にし、牛

の子と熊の子と共に伏し：ししは牛のようにわらを食い、乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。（イザヤ書 11 章 6～9 節）

新しく造られた地では、神のすべての創造物がエデンの本来の完璧さへと回復されます。動物たちは生き延びるために互いを殺すことはなく、人間に危害を与える存在もありません。そこには恐れも、苦しみも、死も存在しません。

人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。
もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、
痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。

—黙示録²¹ 章 4 節

第 19 章

私達の創造主と支え主

はじめに神は天と地とを創造された。

—創世記 1 章 1 節

ここが、すべての真の科学の基礎です。神は私たちの世界を創造されました。神が私たちを想像されました。私たちは偶然の結果ではありません。私たちの存在の背後には、神の目的があります。ところが今日の私たちの世界は、神の言葉の冒頭にある明白な宣言とは正反対の哲学によって浸透しています。無神論は、神を否定するという目的のもと、科学を乗っ取ろうとしてきました。この哲学は、1 世紀以上にわたり科学を締めつけてきました。

この小さな書物の範囲では、創造論に基づく科学を支持する膨大なについて詳しく述べることはできませんが、この主題については優れた書籍が多数存在します。それにもかかわらず、今日では神の存在をめぐる激しい戦いが繰り広げられています。多くの支持者を持つ著名な作家や講演者たちが、神を排除しようとする使命に取り組んでいます。この運動を駆り立たしているものは何なののでしょうか。そして、なぜこれほど多くの人々が神への信仰を拒んだのでしょうか。

多くの誠実な人々が、神について矛盾した見方を持ち続けています。神の愛について聞きながら育った人々も、愛に満ちた神の姿は、すぐに気分を害したり、怒ったり怒りする存在として描かれる対照的なイメージによって、事実上否定されてしまっています。さらに、神が敵に対して死や破壊、永遠の苦しみをもって復讐するという信念が加わると、多くの人が神への信仰を完全に拒絶してしまう理由も理解できます。しかし、この歪められたイメージしか知らないために神の信

仰を拒む人々は、実際には神そのものを拒んでいるわけではないかもしれません。神の存在という二次的な問題は、神の性質という主要の問題がすべての人の心の中で解決されていないために存在しているのです。

神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。（創世記 1 章 31 節）

この聖句は、創造の記述を締めくくるものです。もし神の創造の業が完成する前に、神の被造物のいずれかが死んでいたとしたら、神が地上のすべてを「非常に良い」と見られることはなかったでしょう。神は苦しみや死の創造者ではないため、人類の墮落以前に苦しみと死がこの世界に存在していたという適者生存のような存在はありません。

今日の地球で見られる適者生存の生き方は、罪が入り込んで以来、非常事態の生存モードにあった世界への過酷な適応の結果です。けれども、良い知らせがあります！墮落によって創造主から創造物が疎外されたことは、新しい地で癒されるのです。そのときには、競争も恐れも苦しみも死もない、愛の法が生活のあり方となるでしょう。神がこの地に対して持っておられた本来の目的が、ついに実現されるのです。

神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。（ローマ人への手紙 1 章 20 節）

私たちが科学を学ぶ機会を得たとき、創造物に見られる驚くべき精密さと複雑さに、感謝するようになります。神の署名は、あらゆるところに記されています。神の存在を否定するなら、奇跡の存在も否定しなければなりません。しかし、私たちは奇跡に囲まれて生きています。巨大な木、繊細な野花、鳥のさえずり、蜘蛛の巣、広大な宇宙、母親を認識したときの赤ちゃんの微笑み、そして今この瞬間にあなたがして

いる呼吸。これらはすべて、最高の次元の奇跡です。奇跡以外のもので合理的に説明することはできません。すべての命は奇跡なのです。神が私たちやあらゆる生命を創造されたという証拠は、圧倒的に存在しています。私たちの周りの驚くべき世界を見て、神がそれを創造しなかったと結論づけるのは、理にかなっているとは言えません。

天を創造された主、すなわち神であって、また地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた主はこう言われる、
「わたしは主である、わたしのほかに神はない。（イザヤ書 45 章 18 節）

神は地球を私たちの永遠の家として造られました。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。そして言は肉体となり、私たちのうちに宿った。（私たちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、）めぐみとまこととに満ちていた。（ヨハネによる福音書 1 章 1～3 節, 14 節）

私たちの創造主は、私たちの一人となることで、ご自身がどのようなお方であるかを、より完全に明らかにされました。

わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。（詩篇 8 章 3～6 節）

人間は「御使いよりわずかに低く」造られました。しかし、地上を生き、神と和解した者たちは、「御使いたちも、うかがい見たいと願っている」ような体験を通してきたのです（ペテロの手紙一 1 章 12 節）。彼らの神の自己犠牲的な愛についての体験的な知識は、宇宙において特別な位置を与えられるでしょう。「また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいて、彼らの神となられる』」（黙示録 21 章 2～3 節）

主はその力をもって地を造り、その知恵をもって世界を建て、その悟りをもって天をのべられた。（エレミヤ書 10 章 12 節）

われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。（使徒行伝 17 章 28 節）

宇宙も地球も、地上のすべての生き物も、神から離れて存在するものではありません。私たちの創造主は、世界を構築し、時計のように巻き上げて、そのまま放っておいて自然に機能させるということはされませんでした。神は常に、「その力ある御言葉によって万物を保っておられ」（ヘブル 1 章 3 節）、「万物は神によって成り立っている」（コロサイ 1 章 17 節）のです。

もし、あなたが右手に水の入ったコップを持っていて、それを落とそうと決めたなら、右手でそれを落とさせるために左手を使う必要があるでしょうか。神はこう語られます「わが手は地の基をすえ、わが右の手は天をのべた：わたしが呼ぶと、彼らはもろともに立つ。」（イザヤ書 48 章 13 節）

神が破壊者であると想像することは、神が創造を支える者としての立場を軽んじることになります。神は、破壊を起こ

すために積極的に破壊行為を行う必要はありません。たとえば、ソドムとゴモラの破壊において、一般的な解釈では、神が「支えている」または維持しているものを破壊するために火と硫黄を作り出したとされています。このような破壊者としての神のイメージは、神がご自身と矛盾する存在であるかのように描いてしまいます。まるであなたが左手を使って右手に持っている水のグラスを落とさせようとする場合のように、神自身と矛盾することになります。

神が破壊をなされるためには、ただ手を放すだけのことです。しかし、神がそのようにされるときでさえ、それは死や滅びを望んでのことではないことを理解することが重要です。神が手を放されるのは、神が愛であり、愛が真の自由を必要とするからです。神が人や国を手放されるとき、それはいつも深い悲しみを伴い、仕方なくなされるのです。「エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか。イスラエルよ、どうしてあなたを渡すことができようか。どうしてあなたをアダマのようにすることができようか。どうしてあなたをゼボイムのように扱うことができようか。わたしの心は、わたしのうちに変わり、わたしのあわれみは、ことごとくもえ起っている。」（ホセア書 11 章 8 節）

イエスはエルサレムについてこの嘆きを語られました。「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。」（マタイ 23 章 37～38 節）

人の子が来たのは、人の魂を救うためであって、滅ぼすためではない。（ルカによる福音書 9 章 56 節）

もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞えない。（詩篇 19 篇 1～3 節）

神はご自身の創造物を通して、すべての人に語りかけておられます。言語の違いや印刷された言葉の有無によって、神を知るための招きから除外される人はいません。

目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかたを見よ。主は数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大いなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない。

—イザヤ書 40 章 26 節

第 20 章

永遠の命を得るには

本書の前半で、私たちは創世記第 3 章に記された人類の墮落について読みました。姿を変えた欺きの蛇は、アダムとエバに神が自己中心的で信頼できない存在であると信じさせました。彼らがその嘘を信じたとき、命の与え主から離れようとし、死への歩みが始まったのです。

その日以来、すべての死は神に関するその嘘を信じたことの結果です。人類はエデンの園で神から疎外されました。アダムとエバが神に対する思いを変えてしまったからです。かつては神を信頼していたのに、今では疑うようになってしまいました。これは、今も私たちが抱える的確な問題です。私たちに必要なのは、神に対する思いを改めることです。そうすれば、疑いは信頼に、神への不安は愛に変わり、私たちは創造主と和解し、永遠の命を得るのでしょう。

アダムとエバが神に対する蛇の嘘を信じ、神から隠れようとしたとき、神ご自身はその出来事によって何も変わりませんでした。神の、今では疎遠となった子どもたちへの愛は、少しも減っていませんでした。私たちに対する神の考えを変えようとする私たちの努力に頼る救いの計画はどれも、存在しない問題の解決策を求めるものです。神はすでに私たちに対して良い思いを抱いておられ、私たちを好意的に見ていただくための説得など必要ありません。神はすでに私たち一人ひとりを愛し、限りない価値を認めておられるのです。

神がイスラエル人をエジプトから導き出されたとき、彼らは偶像礼拝の危険について警告されました。聖書時代には、これらの偽りの神々が広く存在しており、それらは歪んだ想像力の産物でした。彼らはしばしば、怒りっぽく、なだめる

必要があると考えられていました。その怒りを鎮めるために、供え物や犠牲が捧げられていたのです。

私たちは、真剣に問いかけるべきかもしれません：私たちが神と関わるその方法は、古代の偶像礼拝から何かを引き継いでしまっていないでしょうか。

永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。（ヨハネによる福音書 17 章 3-4 節）

イエスが父なる神に祈ったこの言葉の中で、彼は永遠の命を明確に示されています。それは、神を知る経験です。この体験的な知識こそが、私たちが命の与え主である神と和解させるのです。このとき、イエスのこの世界への使命の真の目的—それは、神が利己的ではなく、親切で、優しく、慈悲深く、許してくださる方であることを正しく示すことを理解し始めます。人々がイエスの言葉に耳を傾けたとき、彼らは神の言葉を聞いていたのです。イエスが病を癒し、飢えた者に食べ物を与え、励ましを与え、幼子を膝に抱き、自分が誤解され、非難されることさえ受け入れたことを見たとき、人々は神を見ていたのです—栄光に満ちた神の姿を。

混乱を避けるためには、救いにはさまざまな形があるとされているものの、それらの多くが神の姿を矛盾したものとして描いてしまっているということ理解しておくべきことが重要です。本研究では、特に西洋社会のほぼすべての人が何らかの形で触れたことのある、救いの一つの代表的な方法に焦点を当てます。多くの誠実な人々がこの考え方に従っています。それは、救いは法的な問題であるという見解です。

この見解の特徴には、次のようなものがあります：

- 神が子どもたちに与えた自由の賜物よりも、神の主権に重きを置くこと。
- 神が私たちと和解したいと願っておられることよりも、神の救う力に重点を置くこと。
- その信念は、神は非常に清く聖なる存在であるため、彼は神が私たちを愛しておられることを信じることよりも、私たちの罪に憤慨しておられます。実際は、神は私たちをそのままの姿で愛し、近づきたいと願っておられるのです。神が罪に心を痛められるのは、それが神の愛する者たちに何をもたらすかであり、神自身が個人的に腹を立てているからではありません。
- その信念は、神は私たちを彼への病的な恐怖から癒したいと願っていると理解するのではなく、神の怒りを鎮めるために血が必要だということです。神は、罪が命を脅かすことを私たちに理解してほしいと願っておられるのです—神ではなく。
- その信念は、神が私たちの罪を記録し、やがて来る裁きの日にそれを突きつけるのではなく、記録が残されれば、神がすべての人を救うためにできる限りのことをされたことを示すためなのです。
- 神が律法を破った者に罰を課とする見方ではなく、愛の法則と調和しない私たち自身の利己心が、私たちに罰をもたらすことを理解することです。自然の法則を無罪で破ることができないのと同じように、愛の法則を破ってもまた、罰を免れることはできません。
- 福音を神の律法を破ったことに対する罰を受けずに済む方法を神が提供してくれたという良い知らせとして定義するのではなく、福音の本当の良い知らせは神ご自身に関するものであると理解することです。もし神が律法違反に対して死刑を科すような方であるなら、

それは良い知らせではなく 悪い知らせになってしまいます。

- 神を絶対的に信頼できる存在と見るのではなく、救われるという心のあり方。実際には、我々が優しい神の真実に目を向けるほど、*自分自身の救いに対する不安は減り、他者をより愛し、尊重するようになります。*
「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう」（マルコによる福音書 8 章 35 節）。

律法な福音は、救いの確信を得ることに過度な焦点を当てることを常に推奨します。神は、他人の救いの状態を見極めるという重荷を、私たちに課してはられません—それが自分自身であっても。私たちは、自分の霊的状态ではなく、私たち一人ひとりをありのままの姿だけでなく、なり得る姿として見てくださるお方に注目すべきなのです。神は、私たちが自分自身を愛し、価値あるものと見なす以上に、無限に私たち一人ひとりを愛し価値を置いてくださいます。神は、私たちが永遠にご自身と共に生きることを、疑いようもなく望んでおられます。そして私たちが、神は完全に信頼できるお方であり、私たちの恐れに満ちた心を癒す力を十分に持っておられることを理解することを願っておられます。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く」（ヨハネの第一の手紙 4 章 18 節）

私たちは、まったく異なる二つの福音：律法な福音と癒しの福音を簡単に比較してきました。癒しの福音は、イエスの教えと生き方と完全に調和しています。一方、律法な福音は、イエス（私たちの優しい癒し主）を死に至らせた、人間が作り上げた裁判制度と多くの共通点があります。

主は言われる、わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えよう

というのではなく、平安を与えようとするものである。
(エレミヤ書 29 章 11 節)

私たちは、好意的な思いを抱いてもらおうと神を説得する
する目的で、宗教的な活動に多くの時間と労力と費用を費や
してきたことは、途方もない無駄でした。

あなたがたがわたしに対しておこなったすべてのとが
を捨て去り、新しい心と、新しい霊とを得よ。イスラ
エルの家よ、あなたがたはどうして死んでよかろう
か。わたしは何人の死をも喜ばないのであると、主な
る神は言われる：それゆえ、あなたがたは翻って生き
よ。(エゼキエル書 18 章 31～32 節)

神が私たち一人一人に求めているのは、自己中心的な生き
方から命の道へと進むことです。

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して
下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びない
で、永遠の命を得るためである。神が御子を世につか
わされたのは、世をさばくためではなく、御子によっ
て、この世が救われるためである。(ヨハネによる福
音書 3 章 16～17 節)

イエスを信じることは、彼自身（神の子）と父なる神につ
いて彼が明らかにしたことを信じることです。

神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪
過の責任をこれに負わせることをしないで、わたした
ちに和解の福音をゆだねられたのである。(コリント
人への第二の手紙 5 章 19 節)

もし神が私たちを永遠の死から救おうとされたすべての努
力を一言で表すなら、その言葉は、**和解**でしょう。

あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していたが、今や神は和解させてくださいました。（コロサイ人への手紙 1 章 21 節）

人類の墮落以来、疎外への傾向は私たちの心にのみ刻まれてきました—神の心には決して刻まれていません。

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。（コリント人への第二の手紙 4 章 6 節）

この聖句が指す闇とは、私たちの神に対する誤解のことです。神の栄光とは、神ご自身のご性質であり、それはイエスの顔に見られます。

わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。（コリント第二 3 章 18 節）

私たちは、見つめることによって変えられます。この原則は、良くも悪くも働きます。もし神を自己中心の方だと思えば、私たち自身の自己中心的な性質を強めます。しかし、神を完全に無私の方として見るなら、その姿は私たちの内にある自己中心性を根絶します。神の愛、憐れみ、赦しを熟考することは、同じ性質が私たちの内にも映し出される助けとなるのです。

よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。（ルカによる福音書 15 章 7 節）

悔い改めとは、神に「ごめんなさい」と言うことを意味するわけではありません。悔い改めとは、方向転換、すなわち

心の変化を意味します。イエスが教えられた真の悔い改めとは、神に対する心の変化を持つことを意味します。私たちは、イエスが正しく示されたとおりの神の姿を見いだすようになるのです。

すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。
(マタイ 11 章 28～30 節)

私たちは、無駄な精神的自己改善の試みにおいて良くあらうとするために働く必要はありません。基準に達しようとするすべての努力は、自己中心的な考えに陥らせ、誇りか落胆のどちらかをもたらします。イエスはこの葛藤に対する解決を示しておられます。彼はただこう言われました「わたしから学びなさい」と。

すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させるのである。(ルカによる福音書 4 章 17～18 節)

私たちは皆、イエスが私たちのために成し遂げに来てくださったことを必要としています；例外はありません。

第 21 章

裁きを恐れるべきか

裁きについて考えるとき、まず誰が裁かれているのか、そして誰が裁いているのかを見極めることが有効です。エデンの園でのエバと蛇の会話に戻って、蛇はエバの心に、神の公正さ、善意、信頼性に対する疑念を植えたことを思い出してください。慎重に考えてみれば、そこで裁かれていたのは人間ではなかったことが明らかになるでしょう—神でした。

神が自ら裁かれることを許すという考えを理解するのは、私たちにとって難しいことかもしれません。それでも、この視点こそが、聖書を深く学んだ結果に基づく唯一の実行可能な結論です。私たちは、エデンの園で悪魔と交わされた最初の会話以来、知らず知らずのうちに神を裁いてきたのです。私たちは神に対して公正な裁きを行ってきたでしょうか。

私たちは、裁きの中心に自分自身を置こうとする傾向において誤った理解をしている一方で、裁きの対象から完全に免れているわけではありません。神は私たちを裁きの座に置かれたのではありません；むしろ私たち自身が、自らを裁き、罪に定めることに長けているのです。イエスは「わたしの語る言葉は命である」と言われました。私たちは、その言葉を受け入れるか拒むかを選ぶことができます。もしその言葉が本当に命であるなら、それを拒むことは、私たち自身に否定的な結果をもたらす裁きを下していることにならないでしょうか。

神は、法廷で行われるような形で裁きを行われません。私たちが自己非難と死へと向かう道を選び、それに進み続けるならば、神はもはやそれを止めることはなさらず、私たちの選択をやむをえず認めるほかないのです。

裁きには、もう一つ考慮すべき側面があります。他人を裁くとき、それは私たちに悪影響を与えます。他人を非難するとき、私たちはその過程で自分自身を非難していることになるのです。裁きにおいて本当に恐れるべき存在が誰なのかを知りたいければ、鏡の中を見ればよいのです。

姦淫の罪で捕らえられた女の福音書の記述は、裁きがどのように働くかを示す一つの例です：

イエスはオリブ山に行かれた。朝早くまた宮にはいられると、人々が皆みもとに集まってきたので、イエスはすわって彼らを教えておられた。すると、律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫をしている時につかまえられた女をひっぱってきて、中に立たせた上、イエスに言った、「先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」。彼らがそう言ったのは、イエスをためして、訴える口実を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた。彼らが問い続けるので、イエスは身を起して彼らに言われた、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。そしてまた身をかがめて、地面に物を書きつづけられた。これを聞くと、自分の良心により罪を認め、彼らは年寄から始めて、ひとりびとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にいたまま残された。そこでイエスは身を起して女に言われた、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか」。女は言った、「主よ、だれもございません」。イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。ヨハネによる（福音書 8 章 1～11 節、強調付加）

イエスの前に連れて来られ、法律違反者として提示された女性は、宗教指導者たちがイエスを破壊しようとした企てに利用された犠牲者でした。彼女の告発者たちはモーセの律法に訴えました。パリサイ人たちと離婚に関する別の場面で、イエスは彼らに、モーセの律法には彼らの硬い心に対する譲歩が含まれていると語られました。「そこでイエスは言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、あなたがたのためにこの定めを書いたのである。」（マルコ 10 章 5 節）。

この法廷の場面で起こったことの重大さは、イエスが地上において神であり、裁きを行う権威を含む神性のすべての特権を持っておられたことを理解することでより明らかになります。イエスは、目の前に持ち込まれたこの案件に対して、すぐに裁きを下すことはなさらず、むしろ身をかがめて、指で地面に何かを書かれました。人々が問いに対する答えを迫ると、イエスはこう言われました「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。そして再び、地面に書き続けられたのです。

イエスが語られたこと、行われたことにはすべて目的を持っていました。地面に書かれたとき、それは宗教指導者たちの問いを避けるためではありませんでした。イエスは、女性が連れてこられた事情をすべてご存じでした。また、彼女を非難する者たちの過去も知っており、彼らの考えや動機も見抜いておられました。イエスは、彼らの偽善を公の場で厳しく非難することもできましたが、そうはされず、彼はむしろ寛大に、宗教指導者たち自身の罪を土に書くことで気づかせました。－それは彼らの罪を記録する非常に一時的な方法でした。

イエスは、どのような事情であれ、彼の周りに集まった一人一人を愛し、限りない価値を認めておられました。彼の使命は世界を救うことであり、彼は女性とその告発者たちとの

和解を求めておられました。彼らをさらに疎外することなど、望んではいなかったのです。

イエスは宗教指導者たちに向かって、「あなたがたのうち、罪のない者が、まずこの女に石を投げなさい」と言われました。ここでイエスは、裁きの責任を彼ら自身に委ねられたのです。イエスはこの世に、裁きや非難を行うために来られたのではなく、裁く者として押し出されることはありませんでした。では、律法学者やパリサイ人たちは、彼の言葉を女性に石を投げる許可と受け取ったのでしょうか。どうやらそうではなく、彼らは皆、「一人また一人」とその場を立ち去っていきました。

イエスは神として、その女性を非難しませんでした。が、「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないようにい」と語られたその言葉の中に、彼女の人生への新しい道を開かれたのです。イエスは、彼女がその場に連れてこられる原因となった行為をやめるよう命じたのではなく、彼女を死に至る罪から解放しようとされたのです—神は信頼に値しないと信じること。

イエスは、この女性に将来の非難を避ける道を示されました。彼は、彼女を一人の人間に対する神の愛を明らかにされました。女性は命を与える方の前に立ち、自分がこの方を愛し、信頼できることを知りました。この出会いの後、彼女の神に対する見方と関係は根本的に良い方向へと変わりました。彼女にとって、この裁きは、人生を変え、命を与えるものとなったのです。

イエスは、女性をすぐに非難した冷淡な律法学者やパリサイ人たちを、非難なさいませんでした。が、彼らの心の闇を映し出す霊的な鏡を彼らの前に差し出されました。その結果、彼らは「自分の良心によって罪を自覚し」、命の与え主であるイエスの純粋で利他的な愛の前から、立ち去らざるを得ま

せんでした。他者を非難するためにやって来た彼らは、結局、自らを非難することになったのです。

だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正しく下ることを、知っている。ああ、このような事を行う者どもをさばきながら、しかも自ら同じことを行う人よ。あなたは、神のさばきをのがれうと思うのか。（ローマ人への手紙 2 章 1～3 節）

神は、私たち一人一人に真の自由を与えておられます。自己非難を選ぶ私たちの意思を、神は無理に覆すことはなさいません。ここでの神の裁きとは、私たちが相互の愛と命の輪の外にとどまることを選ぶとき、その自己非難を神が仕方なく承認されるということです。この裁きから逃れる道はありません。なぜなら、神は私たちの意思に反して、人が命へと続く道を歩ませることを強制することはできないからです。

父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。（ヨハネによる福音書 5 章 22 節）

神であり父である方は、私たちを裁きません。

人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。（ヨハネによる福音書 6 章 63 節）

イエスの言葉は命です。イエスが語られた一つ一つの言葉の中に、神の和解の愛が現れていました。

イエスは大声で言われた、「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなく、わたしをつかわされたかた

を信じるのであり、また、わたしを見る者は、わたしをつかわされたかたを見るのである。わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである。たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである。わたしを捨てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。（ヨハネ 12 章 44～48 節、強調付加）

イエスは私たちを裁かれません。神は命の言葉を差し出しておられますが、それを受け入れるよう強制されることは決してありません。

人をさばくな。自分がさばかれたいためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。（マタイ 7 章 1～5 節）

もし父なる神が私たちを裁かれず、イエスも私たちを裁かれないのであれば、わたしが自分自身の裁きの心（自分の目の中の梁）を抱えたまま、他人を裁く資格があると思うのはなぜでしょうか。

よくよくあなたがたに言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠

の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。（ヨハネによる福音書 5 章 24 節）

神についての真実を理解し、彼を信頼することを学ぶことは命に至る道です。イエスは言われました。「彼を信じる者は裁かれない」（ヨハネによる福音書 3:18）。

そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。（使徒行伝 13 章 46 節）

これは、自己非難の啓発的な例です。

人をさばくな。そうすれば、自分もさばかれることがないであろう。また人を罪に定めるな。そうすれば、自分も罪に定められることがないであろう。ゆるしてやれ。そうすれば、自分もゆるされるであろう。（ルカの福音書 6 章 37 節）

ルカによる福音書の放蕩息子のたとえは、神が私たちの願いよりも先に、すでに赦しを与えておられることを教えています。もし私たちが裁かれ、罪に定められ、赦されないでいるとすれば、それは自分自身の責任です。「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。」（ガラテヤ 6 章 7 節）からです。

そこでイエスは言われた、「わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」。そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、それを聞いてイエスに言った、「それ

では、わたしたちも盲人なのでしょうか」。イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。（ヨハネによる福音書 9 章 39～41 節）

イエスがこの世に来られた「裁き」とは何でしょうか。イエスは、人類に対する神の愛と、私たち一人ひとりにどれほどの価値を見出しておられるかを明らかにするためにこの世界に来られました。神が私たちを見るように、私たちも互いに相手を見ること、そして、神が私たちを尊ばれるように互いを尊重することを望んでおられます。また、イエスは、他人の罪や私たちを分断する人工的な違いにも盲目であることを教えておられます：宗派主義、国家主義、部族意識、党派的政治、あるいは私たち対彼らという考えを促すあらゆる仕組み。

パリサイ人たちは、イエスが教えていたこの教訓を理解しませんでした。彼らは強烈な宗派主義者であり、ユダヤ人の血筋でない異邦人を犬のように見ていました。また、他人の罪を見抜いて裁くことに関しては、自らを専門家のように振る舞っていたのです。

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが惡いために、光よりもやみの方を愛したことである。（ヨハネによる福音書 3 章 16～19 節、強調付加）

この箇所では、*名前*は、性質を意味しています。イエスが明らかにした神のご性質の啓示を拒むことは、実際には神を拒むことです。イエスのうちで、神はこう語っておられるのです—これが、わたしの本当の姿である。

夜が明けると、祭司長たち、民の長老たち一同は、イエスを殺そうとして協議をこらした上、イエスを縛って引き出し、総督ピラトに渡した。（マタイによる福音書 27 章 1～2 節）

なんという光景でしょう。罪にまみれた宗教者たちが、命の与え主の死を求めているのに、彼は抵抗することもなく、彼らを裁くことさえなさらないのです。では、いったい何が、あるいは誰が死をもたらすのでしょうか—神でしょうか、それとも罪でしょうか。

私たちは、キリストが死を迎える直前の最後の時を読んで、聞くことはあっても、その裁判と十字架刑の背後にある深い意味を見抜くことはなかなかありません。イエスは、完全に神であると同時に、完全に人間でもあります。ポンテオ・ピラトの前で裁かれたとき、彼は完全に神でした。裁かれ、宣告されたときも、完全に神でした。鞭打たれ、嘲られ、十字架に釘づけにされて死に至る時も、ずっと、完全に神であられたのです。

神は、ご自身が愛し、和解を願っておられる人々によって、裁かれ、宣告されることをお許しになりました。なぜでしょうか。それは、私たちが自分の罪が神にどれほどの痛みをもたらしているかを、理解するのが非常に難しいからです。

神の御子イエスは、地上での最後の時間に苦しみを受けられました—私たちの想像を超えるほどに。しかし、イエスの苦しみはゲッセマネの園から始まったのではなく、十字架上での最後の言葉で終わったわけでもありません。神は、罪がこの世界に初めて入り込んだ時から、私たちと共に、そして

私たちのために苦しんでくれました。そして、罪がその破壊的な道を完全に終える日まで、神は私たちと共に、私たちのために苦しみ続けてくださるのです。

イエスが、無限の愛を分かち合うために創造された人々の手によって裁かれ、苦しみを受けられたことは、私たちが何千年にもの間、神に与えてきた苦しみの姿を私たちに示すべきです。私たちは今もなお、神を人間の法廷に引き出し、無関心、無行動、冷淡さ、さらには積極的かつ復讐的な破壊行為の罪で告発し続けています。そして、あまりにも多くの場合、有罪との判決を下してしまうのです。神が、離れてしまった子どもたちと和解するために、これ以上何をなさることができのでしょうか。十字架は、神による和解の傑作です。十字架は、神が利己的で、思いやりがなく、信頼できないとするサタンの主張を完全に打ち砕きます。

たとえ私たちがどれほど神のご性質を誤って汚してしまっただとしても、良い知らせがありますー神は、私たちがなぜ彼を誤解してしまうのかをご存じであり、そのことで私たちを責めたりはなさいません。私たちが、神のなさったこと、そして今も行い続けてくださることに対して感謝を示さなくても、神は変わらず私たちを愛し続けてくださいます。けれど、もし私たちがすべては自分のためではないということに気づいたら、それは神にとってどれほど喜ばしいことでしょうか。私たちの創造主も私たちの困難に深く関わっているのです；私たちは、神のことを考えることができるでしょうか。私たちは神の本当の姿、つまり妥協のない、他者中心の愛を理解し、彼にふさわしい愛に応えることができるでしょうか。それは、あまりに難しいことなのでしょうか。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。」（ヨハネの手紙第一 4 章 19 節）

彼らの苦難を常に御自分の苦難とし御前に仕える御使いによって彼らを救い愛と憐れみをもって彼らを贖い昔から常に彼らを負い、彼らを担ってくださった。

ーイザヤ書 63 章 9 節

第 22 章

神の裁きとはどのようなものか

善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ。

—イザヤ書 1 章 17 節

神の裁きとは、私たちに有罪判決を下すような司法的な宣告ではありません。ここで言う裁きとは、苦しみを取り除き、不公平な世界の中で公正さを促すことなのです。

見よ、わたしが選んだ僕、わたしの心にかなう、愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授け、そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。彼は争わず、叫ばず、またその声を大路で聞く者はない。彼が正義に勝ちを得させる時まで、いためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない。異邦人は彼の名に望みを置くであろう」。 (マタイによる福音書 12 章 21 節)

神の公正で穏やかな裁きは信頼を生みます。

あなたがたの地の実のりを刈り入れるときは、畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。またあなたの刈入れの落ち穂を拾ってはならない。あなたのぶどう畑の実を取りつくしてはならない。またあなたのぶどう畑に落ちた実を拾ってはならない。貧しい者と寄留者とのために、これを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。(レビ記 19 章 9～10 節)

神は、古代社会において不利な立場の人々のために備えをしようとなさいました。

もし他国人があなたがたの国に寄留して共にいるならば、これをしえたげてはならない。あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならぬ。あなたがたもかつてエジプトの国で他国人であったからである。わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたは、さばきにおいても、物差しにおいても、はかりにおいても、ますにおいても、不正を行ってはならない。あなたがたは正しいてんびん、正しいおもり石、正しいエパ、正しいヒンを使わなければならない。わたしは、あなたがたをエジプトの国から導き出したあなたがたの神、主である。（レビ記 19 章 33～36 節）

わざわざいなるかな、不義の判決を下す者、暴虐の宣告を書きしるす者。彼らは乏しい者の訴えを引き受けず、わが民のうちの貧しい者の権利をはぎ、寡婦の資産を奪い、みなしごのものをかすめる。（イザヤ書 10 章 1～2 節）

神は包括的なお方ですー神のもとには**部外者**はいません。神は、人間の法律や商慣行、そして貧しい人々の犠牲にして富む人々に利益をもたらす制度をすべてご存じです。神はそれを略奪と呼ばれます。取引におけるいかなる形の虚偽やごまかしも、聖書においては盗みと定義されているのです。

彼らは言う、『われわれが断食したのに、なぜ、ごらんにならないのか。われわれがおのれを苦しめたのに、なぜ、ごぞんじないのか』と。見よ、あなたがたの断食の日には、おのが楽しみを求め、その働き人をことごとくしえたげる。見よ、あなたがたの断食するのは、ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぼしをもって人を打つためだ。きょう、あなたがたのなす断食は、その声を上に聞えさせるものではない。このようなも

のは、わたしの選ぶ断食であろうか。人がおのれを苦しめる日であろうか。そのこうべを葦のように伏せ、荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。あなたは、これを断食となえ、主に受けいられる日と、となえるであろうか。わたしが選ぶところの断食は、悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどの事ではないか。また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これを着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。（イザヤ書 58 章 3～7 節）

助けを必要としている人々を無視するなら、単に宗教的な儀式をこなすことでは、何の価値もありません。イエスはこう宣言されました。「あなた方パリサイ人は、わざわざである。はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を宮に納めておりながら、義と神に対する愛とをなおざりにしている」（ルカ 11 章 42 節）。

「万軍の主はこう仰せられる、真実のさばきを行い、互に相いつくしみ、相あわれみ、やもめ、みなしご、寄留の他国人および貧しい人を、しえたげてはならない。互に人を害することを、心に図ってはならない」。（ゼカリヤ書 7 章 9～10 節）

神は、いかなる形の抑圧もお認めにならず、自分の利益のために他者を犠牲にするような策略をも、決して是認されません。

わたしの兄弟たちよ。わたしたちの栄光の主イエス・キリストへの信仰を守るのに、分け隔てをしてはならない。たとえば、あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな着物を着た人がはいつて来ると同時に、みすぼらしい着物を着た貧しい人がはいつてきたとす

る。その際、りっぱな着物を着た人に対しては、うやうやしく「どうぞ、こちらの良い席にお掛け下さい」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこに立って下さい。それとも、わたしの足もとにすわっているがよい」と言ったとしたら、あなたがたは、自分たちの間で差別立てをし、よからぬ考えで人をさばく者になったわけではないか。愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに約束された御国の相続者とされたではないか。しかるに、あなたがたは貧しい人をはずかしめたのである。あなたがたをしいたげ、裁判所に引きずり込むのは、富んでいる者たちではないか。あなたがたに対して唱えられた尊い御名を汚すのは、実に彼らではないか。しかし、もしあなたがたが、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という聖書の言葉に従って、このきわめて尊い律法を守るならば、それは良いことである。（ヤコブの手紙 2 章 1～8 節）

神に偏りはありません；私たちは皆、神の目には平等なのです。「神は人をかたよりみないかた」（使徒行伝 10 章 34 節）。

父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まらずに、身を清く保つことにほかならない。（ヤコブの手紙 1 章 27 節）

純粋な宗教とは、宗派主義でも、儀式主義でも、教義主義でも、感情主義でも、教會的順応でもありません。

そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい

い。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。
(マタイによる福音書 25 章 34～40 節)

イエスの兄弟姉妹となるための資格は何でしょうか。それはひとつだけです：人類の一員であることです。私たちは皆、イエスの家族なのです。

なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく。

—イエス(マタイの福音書 8 章 11 節)

第 23 章

神は謙虚である

神は、宇宙で最も力ある存在であると同時に；最も謙虚な存在でもあります。

御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。(ルカによる福音書 2 章 10～12 節)

神は、私たちの世界に入って来られるために、最も謙虚な方法を選ばれました—それは、飼い葉桶に横たわる、無害な赤ん坊としてでした。

すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。(マタイによる福音書 11 章 28～30 節)

神の御子イエスが、これ以上どのように明確に示せたでしょう。彼は言われます「わたしは柔和で心のへりくだった者である」と。

イエスはその人に言われた、「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」。(マタイによる福音書 8 章 20 節)

ここでイエスは、社会の中で最も貧しい人々、すなわち、住む場所のない人々とご自身を重ねておられます。

そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言って敬礼をいはじめた。また、葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ、ひざまずいて拝んだりした。こうして、イエスを嘲弄したあげく、紫の衣をはぎとり、元の上着を着せた。それから、彼らはイエスを十字架につけるために引き出した。それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。また、イエスと共にふたりの強盗を、ひとりを右に、ひとりを左に、十字架につけた。〔こうして「彼は罪人たちのひとりに数えられた」と書いてある言葉が成就したのである。〕（マルコ 15 章 17～20 節、24 節、27～28 節）

神の御子イエスは、飼葉桶での謙虚な誕生から、二人の犯罪者の間で十字架にかけられる死に至るまで、終始一貫して柔和と謙遜を示されました。

人よ、彼はさきによい事のなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。（ミカ書 6 章 8 節）

ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだろうか。（アモス書 3 章 3 節）

私たちが神のように謙虚であるとき、私たちは神と調和して歩むことができます。

私たちの優しい神が示されたその深い謙遜を理解したとき、その信頼性をほんの少しでも疑うことが、どうしてできるでしょうか。

われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。

—イザヤ書 53 章 6～9 節

第 24 章

神は従者であり、奴隷の主人ではない

わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。

—イエス（ヨハネによる福音書 15 章 15 節）

神は、私たちに盲目的な信仰の服従を求めておられるのではありません。神が望まれるのは、私たちとの友情です。私たちが友人と話すとき、形式ばった言葉や神秘的な表現は使いません。神は、私たちが親しい友人と話すように、正直に神と話すことを望んでおられます—これこそが、祈りの本当の意味です。神は、私たちに思考する能力を与えて創造されました。そして、その能力を用いるように招いておられます；「さあ、われわれは互に論じよう、と主は言われる」（イザヤ書 1 章 18 節）。

そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおりに、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のががないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。（マタイ 20 章 25～28 節）

イエスはいのちの法則を示されました―他の者に仕えるために自らを捧げました。

イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。そこで、その評判はシリヤ全地にひろまり、人々があらゆる病にかかっている者、すなわち、いろいろの病気と苦しみとに悩んでいる者、悪霊につかれている者、てんかん、中風の者などをイエスのところに連れてきたので、これらの人々をおいやしになった。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。（マタイによる福音書 4 章 23～25 節）

ひとりのらい病人が、イエスのところに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、らい病が直ちに去って、その人はきよくなった。（マルコによる福音書 1 章 40～42 節）

イエスは、あらゆる苦しみに和らげるために、惜しみなく、そして思いやりをもって働かれました。誰一人として彼の注意と愛の配慮から外れる者はいませんでした：「イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。アーメン」（ヨハネによる福音書 21 章 25 節）

イエスは、父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを思い、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、それから水

をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。（ヨハネによる福音書 13 章 3～5 節）

この啓示的な「神の業」は、キリストの最後の晩餐、すなわち裁判と十字架刑のわずか数時間前に起こりました。ルカによる福音書は、この場面で弟子たちの間に起きた決定的な詳細を記しています。「それから、自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと言って、争論が彼らの間に、起った。」（ルカの福音書 22 章 24 節）

場面はこうです：イエスは、ご自身が神から来た者であることを知っておられました。言い換えれば、イエスは自分が神であり、神のすべての力を持っていることを完全に理解していました。弟子たちが誰が神の国で一番偉いかについて争っていることも、イエスは知っておられました。イエスは、何をされたのでしょうか。「手ぬぐいをとって腰に巻き」、自尊心の強い弟子たちの足を洗われたのです。（当時の文化では、家の奴隷の仕事でした。）

キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、

—ピリピ人への手紙 2 章 5～7 節

第 25 章

神はあなたを無条件に愛しておられる

女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子をあわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。

—イザヤ書 49 章 15～16 節

私たちは、神に忘れられてしまったのではないかと感じる時があります。けれども、必ずしも現実の正確な尺度ではありません。神は、決して私たちを忘れないと言われます。「五羽のすずめは二アサリオンで売られているではないか。しかも、その一羽も神のみまえて忘れられてはいない。その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である」（ルカによる福音書 12 章 6～7 節）。

わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。（ローマ人への手紙 8 章 38～39 節）

神の私たちへの愛を過大に表現することは不可能です。私たちがその愛を描写しようとするすべての努力は十分ではありません。

わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。（ヨハネ第一の手紙 3 章 1 節）

神が私たち一人一人に望んでおられることは、私たちが神を天の父として認識することです。そうすれば、私たちが神の息子や娘としての受け継いだ立場を理解するようになります。

あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あなたがたに言うが、彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである。〔人の子は、滅びる者を救うためにきたのである。〕あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。（マタイによる福音書 18 章 10～14 節、強調付加）

玉座に座る最も高慢な君主から、路上にいる最も貧しい乞食に至るまで、すべての人は神にとって価値ある存在です。どれほど価値があるのでしょうか。神は天を離れ；ただ一人の人間の家族のために苦しみ、死なれることを選ばれたでしょうーもし、その人が救いと和解を必要とする唯一の存在であったとしても。

はい、わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。

—エレミヤ書³¹ 章 3 節

第 26 章

神の国

神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」。

—イエス（ルカによる福音書 17 章 20～21 節）

この世の王国や制度はすべて目に見えるものであり、目に見える政府の座や本部があります。もし私たちが神の王国の目に見える現れを探しているなら、私たちはそれを見つけることはできません。神の王国は、私たちの利己心が神と互いへの愛に置き換わるとき、私たちの心の中にのみ明らかになります。

そして彼（イエス）は言われた、「神の国を何に比べようか。また、どんなたとえで言いあらわそうか。

（マルコによる福音書 4 章 30 節）

この世の王国しか知らない人々に、神の王国を正確に伝える言葉を人間の言語の中に見つけることは、どれほど難しいことでしょうか。

イエスは彼に答えて言われた、「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。（ヨハネによる福音書 3 章 3 節）

霊的な事柄を理解できるようにするのは、聖霊の働きです。私たちが聖霊の穏やかな働きを受け入れるとき、霊的な現実が焦点となり、神の国を見ること、あるいは理解することが可能になります。この新しい現実に対する視点の変化は、和

解と命を与えるものであり、“新たに生まれる”ことに似ています。

聖霊は、私たちが時折想像するような宗教の枠の中だけで働くわけではありません。聖霊は、背景、地理的位置、あるいは表明された信念に関係なく、すべての人に語りかけます。無神論者でさえ、聖霊の心への働きから免れることはありません。神は私たちのような近視眼的な偏見を持っておらず、ご自身の存在を信じていない人に対しても、気分を害されることはありません。

聖霊が理解させる霊的な事柄の本質は、単なる知識ではなく、心の変化です。たとえば、思いやりがあり寛大な不可知論者や無神論者の方が、自己正当化的でかたくなな信者よりも、聖霊の影響に敏感であり、神の国に近いのです。神にとってより困難なのは、どちらでしょうか—ご自身の存在について人の考えを変えること、あるいは頑固でかたくなな心を変えること。

イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。(マルコの福音書 10 章 13～15 節)

神とその王国についての真理を学ぶ際に最も困難なのは、学ぶことそのものではなく、学び直さなければならないことです。私たちの多くは、神のイメージを築くことに莫大な投資をしてきました。そのイメージが歪んでいる場合、それを手放すことは特に困難です。歪んだ神のイメージは長い間、一般的な宗教の中に埋め込まれてきたため、神とその王国の

真実を理解する上で最大の障害となります。子どもたちはこの歪んだ神のイメージに比較的少ない影響しか受けていないため、優しい神についての真実を受け入れやすいのです。

そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」。すると、イエスは幼な子と呼ばせ、彼らのまん中に立たせて言われた、「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。（マタイによる福音書 18 章 1～4 節）

天の御国は、この世の王国とは正反対です。そこには、傲慢、操作、強制、地位への誇りの入り込む余地はありません。私たちは、天の父への子どものような信頼と、教えを受け入れる素直な心を持つ必要があります。

また、天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである。また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである。（マタイによる福音書 13 章 44～46 節）

私たちが神についての真実を理解するようになるとき—すなわち、神が限らない他者中心の愛を持ち、完全に信頼でき、憐れみ深く、寛大であること—を理解するとき、同時に、神の王国がどのようなものであるかを明確に理解することになります。私たちは、価値のない歪んだ神のイメージを価値のないもの見て、神とその王国の真のイメージを得るためにそれを喜んで売るのである。

ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」。イエスは答えられた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。そこで、この律法学者はイエスに言った、「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであって、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」。イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、「あなたは神の国から遠くない」。(マルコによる福音書 12章 28～34 節)

イエスは、彼に答えていた律法学者を励まされました。「あなたは神の国から遠くない。」その律法学者は、多くの人々よりも霊的現実を深く理解していました。彼は聖書を浅く読むだけでなく、イエスが示された“愛の律法”のビジョンを把握していました。

愛の律法が唯一の国の法となるとき、新たに生まれ変わった地球はどのようなものになるのでしょうか。神の他者中心の愛が人類全体に反映されるでしょう。すべての人が互いを「自分よりも優れた者」として愛し、評価するでしょう(ピリピ 2:3)。そこには、私たちの想像をはるかに超えた幸福と安らぎの状態が存在するのです。

しかし、聖書に書いてあるとおり、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」

—コリント人への第一の手紙 2 章 9 節

第 27 章

神は真の自由を与えてくださる

神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものを治めさせよう」。

—創世記 1 章 26 節

神が人類に与えられた地球の支配権は、虐待や搾取を認めるものではありませんでした。アダムとエバ、そしてその子孫たちは、地球とその中のすべての生き物に対して、愛に満ちた管理者であるべきでした。聖書には「地は人の子らに与えられた」（詩篇 115 篇 16 節）と記されています。

私たちの最初の祖先が、神は利己的で制限的であるという偽りを信じたとき、彼らは欺く者に打ち負かされ、その心は彼の支配下に置かれました。「この人々に自由を与えると約束しながら、彼ら自身は滅亡の奴隷になっている」（ペテロの手紙第二 2 章 19 節）とある通りです。かつて自由を持っていたアダムとエバは、今や彼らの子孫とともに悪魔の支配に置かれました。墮落の直後の恐ろしい瞬間、人類はサタンと他の墮天使たちと同じ避けられない滅びに、無力に陥るしかないかのように見えました。

しかし、良い知らせがあります；神は、彼らとその子孫のために、束縛からの脱出の道を備えてくださいました。この緊急事態に対応して、神はサタンにこう語られました。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に」（創世記 3 章 15 節）。この“恨み”とは何でしょうか。

サタンとその従者たちが天で神に反逆したとき、彼らは父なる神、御子、そして聖霊との長年の関係の立場からそれを行ったのです。彼らは神の愛を十分に知る経験を持ち、神の善を疑う理由などまったくありませんでした。彼らが自ら神との関係を断ち切ったとき、聖霊の働きかけに応える力を自ら失ってしまいました。頑固な誇りによって、彼らは悔い改めて創造主のもとに立ち返ることができなくなり、やがて闇と消滅へと向かう運命を自らに定めてしまったのです。

アダムとエバが罪を犯したとき、彼らは神についての限られた知識と神との限られた経験からそうしたのでした。彼らはサタンに欺かれました；創造主を拒むことを意図的に決定したわけではありませんでした。人類の神からの隔たりは、回復の道がないものではありませんでした。神がサタンと女との間に「敵意を置く」と約束されたことは、地上における最初の福音のメッセージでした。

神は憐れみ深く、アダムとエバ、そしてその子孫に希望を与えられました。彼らの心と思考は、なお聖霊に応える力を持っている－神の愛に心を開いたままでいることができます。人類のサタンへの束縛は完全ではないでしょう。一人ひとりの自由意志は保たれ、サタンの影響を制限し、私たちには創造主との和解を選ぶ自由が確かに残されていたのです。

被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。（ローマ 8 章 21 節）

キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない。（ガラテヤ人への手紙 5 章 1 節）

もし子があなたがたに自由を得させるならば、あなたがたは、ほんとうに自由な者となるのである。（ヨハネによる福音書 8 章 36 節）

この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである。「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。（コリント第二 4 章 4 節、6 節）

今こそ、サタンがキリストの福音に覆いかけた律法主義と矛盾の暗い覆いを投げ捨て、私たちの優しい神に対する誤解に加わらない道を選ぶべき時ではないでしょうか。

もしわたしの言葉にうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであらう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであらう」。

ーイエス（ヨハネによる福音書 8 章 31～32 節）

真実とは、私たちの優しい神についての良い知らせです！

主はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあつて、わたしを知っていること、わたしが主であつて、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる。

—エレミヤ書 9 章 23～24 節

Encapsulation 参考文献一覧

1. Correctly understood, the Bible is reasonable. The Bible defines and interprets itself. (イザヤ書 1:18; コリントの第一の手紙 2:13)
2. Our ways and thoughts do not reflect God's ways and thoughts. (イザヤ書 55:8-9; 詩編 50:21)
3. God's glory is his character. (出エジプト記 34:6-7; コリント人への第二の手紙 4:4, 6)
4. God is love. (ヨハネの手紙第一 4:8, 16)
5. God's love is totally unselfish. (ヨハネによる福音書 3:16-17; ローマ人への手紙 5:8)
6. Love requires freedom. (申命記 30:19-20 ; ヨハネによる福音書 8:32, 36)
7. Jesus is God. (ヨハネによる福音書 1:1-3, 14; コロサイ人への手紙 1:13-17)
8. Jesus is the clearest revelation of God. (ヘブル人への手紙 1:3)
9. God never changes. (マラキ 3:6; ヘブライ 13:8; ヤコブ 1:17)
10. God is the Creator and Sustainer—not the destroyer. (創世記 1:1、詩篇 33:6,9、ヘブライ人への手紙 1:3、ルカ 9:56、ヨハネ 10:10)
11. The question in dispute is about God's principles of governance—it's not about his power. (創世記 3:1-5)
12. God's kingdom is governed by the law of love—not by the rule of law. (マタイ 22:37-40; ガラテヤ 5:14, 22-23; コリント第一 13)
13. God never uses force. He overcomes evil with good. (マタイによる福音書 5:43-48; ローマ人への手紙 12:20-21; ルカによる福音書 23:34)
14. Satan is God's antagonist and a master of deception. (ヨハネによる福音書 8:44; コリント人への第二の手紙 11:14; 黙示録 12:7-9; ペテロの第一の手紙 5:8)
15. Sin is seeing God as self-serving and untrustworthy. (創世記 3:1-5; コロサイ人への手紙 1:21)
16. Sin is deadly—not God. (ローマ 6:23; ヤコブ 1:13-15)

17. God doesn't judge us—we judge ourselves. (ヨハネによる福音書 3:17-21; 5:22; 12:44-48; マタイによる福音書 7:1-5; ルカによる福音書 6:37; ローマ人への手紙 2:1-3)
18. The gospel is the good news about God. (コリント人への第二の手紙 4:3-6; ヨハネの黙示録 14:6-7; ルカによる福音書 15:11-32; ヨハネによる福音書 3:16-17; ローマの信徒への手紙 5:8)
19. Salvation is healing reconciliation—it is not a legal issue. (マルコによる福音書 2:16-17; ルカによる福音書 4:18-19; 使徒言行録 28:27; コリントの信徒への第二の手紙 5:18)
20. To know God is eternal life. (ヨハネによる福音書 17:3)



『私たちの優しい神の御業』は、神が冷淡で、批判的で、支配的で、不公平で、短気で、暴力的であるという非難を晴らすために、聖書からの説得力のある証拠を提示します。この本は、聖書全体が正しく理解されれば、「神は愛である」（ヨハネの第一の手紙 4:8）という決定的な言葉と調和していることを本書は明らかにします。



著者が「優しい神」の姿をより明確に捉えるまでの旅路は、50年以上にわたります。現在は妻ジュリーとともに、ミネソタ州北部のウォールデン風の山小屋で暮らしています。彼は、多くの四本足の仲間や羽のある友人たちと心豊かな時間を過ごしています。